

Title	ドイツ語の状態受動に関する一考察
Sub Title	Zustandspassiv im Deutschen
Author	鈴木, 直樹(Suzumura, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.40 (2005.) ,p.75- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20050000-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ語の状態受動に関する一考察

鈴 村 直 樹

1.

本稿は現代ドイツ語の状態受動が動作受動完了形との混用に関していかなる発展段階にあるか、換言すれば *ist...geöffnet* と *ist...geöffnet worden* はいかに接近可能かを対照言語学的な観点から検証するものである。もとより能動態と受動態の境界は厳密にみれば不明確で、状態再帰構文 (*Zustandsreflexiv*) や中間構文 (*Mittelkonstruktion*), *lassen + sich* や *sein + zu*, あるいは *man* 構文や *bekommen* 受動など「態」に関連する諸形式は他にも少なからず存在する。しかしここではまず一般の理解に従い、以下 (1a) のような *werden*+ 過去分詞を動作受動, (1b) のような *sein*+ 過去分詞を状態受動とし、かつ、この両者がドイツ語の受動形式の中心を成しているものとして議論を始めたい¹⁾。任意の言語は「仮に二種類の受動態を有し、その一方が BE (*sein*) を含むならば、状態 (*stative meaning*) はその形式により実現される²⁾」といわれるが、(1) の対立をそもそもの出発点とすることはこの対照言語学的な見解と単に軌を一にするのみならず、*bleiben* などで形成される受動態を少なくとも状態特性という観点からは周辺現象と位置づけることを意図したものである³⁾。

- (1) a. Die Tür wird um 8 Uhr geöffnet.
b. Die Tür ist den ganzen Tag geöffnet.

周知の通り，現代ドイツ語の能動態と受動態には出現頻度に大きな差が認められ，Brinker (1971) の研究によれば，定動詞を含む文の場合，約 93% を占める能動態に対して，受動態の割合は僅か 7% にすぎない。また受動文中の動作受動と状態受動の比率はほぼ 3 : 1 で，結果，状態受動が全テキスト中に占める割合は 1.8% に満たない計算になる⁴⁾。この分布のありかたは 16 世紀にはすでに達成されていたとみられ，例えば Luther の ‘An den christlichen Adel deutscher Nation’ における両者の出現はそれぞれ 5.0% と 1.9%，すなわち合計で全体の約 7%，かつその比率はすでに 3 : 1 に近かったことが確認されている⁵⁾。

こうした werden の優位はまた現代語の文法制約からも明らかで，状態受動の形成には動作受動に課されるほぼすべての制約が適用される。通常，動作受動は対格が a) 副詞的，b) 不定詞つき (AcI)，c) 再帰代名詞，d) haben, bekommen の目的語，e) 存在文中に現れるなどの場合には許容されないが，まずこれらは同時に状態受動に対する制約でもあり (→例文 (2))，そのうえで状態受動にはなお付加的な形成条件が存在する (詳細 3.2. 節)。

- (2)
- a. Er arbeitet den ganzen Tag. (*Der ganze Tag wird/ist gearbeitet)
 - b. Er sieht sie kommen. (*Sie wird/ist kommen gesehen.)
 - c. Er wäscht sich. (*Er wird/ist von sich gewaschen.)
 - d. Er hat ein Haus. (*Ein Haus wird/ist gehabt.)
 - e. Es gibt hier keine Toilette. (*Keine Toilette wird/ist hier gegeben.)

さらに動作受動と状態受動の分布を汎言語的にみると，印欧語は大多数が (1) のように be-passive と non-be-passiv をともに備え，セム語をはじめ日本語，トルコ語，中国語などは non-be-passive のみを有しているが，唯一 be-passive だけを持つ言語は例がないとされる⁶⁾。これに従えば be-passive は言語の中に第一の受動態として現れることがなく，その出現は常に非状態指向の別の受動形式の存在を前提にしていることになる。仮

に対立する言語特性 x, y について、その両者を備えた言語が存在し、これとは別に特性 x のみを示す言語が存在し、かつ、特性 y のみを示す言語が存在しないならば、 x が主要特性で y はなんらかの派生形と考えるのが自然であるが、この意味でドイツ語の状態受動は、それが *sein* を用いて形成される以上、少なくとも共時的かつタイポロジカルには二次的な現象である。

分布状況、文法制約、対照分析などから得られるこうした知見は、現代語に至る過程で *werden* の役割が強化され、逆に *sein* のそれが抑制されたことを示すもので、ともすれば状態受動が瑣末な研究対象になりつつあるかのような印象を与えかねない。しかし *werden* と *sein* の関係は歴史的にはまったく逆の形で始まっており、ドイツ語がおかれた現在の状況はむしろ言語変遷のある段階を一時的に反映したもの、あるいは単にゲルマン語の中の一言語の発展過程を部分的に描写したものにすぎないと思われるべきである。実際、ドイツ語のみならず英語やオランダ語においてもその初期段階では *sein* の果たす役割が支配的であり、例えばゴート語では *wisan+* 過去分詞こそが受動一般を表す形式、*wairthan+* 過去分詞は状態の開始を表すための有標な構造という区分が確立していた⁷⁾。また、かつては *wesan* 受動と *weordhan* 受動をともに有していた英語では、15世紀に後者が消滅して *be* のみが残る結果となったが、現代英語の *be* 受動は少なくとも動作・状態の読みに関しては曖昧で、それを埋めるための補充形式、つまり *be* を非曖昧化するための手段として *become*, *get*, *be being+* 過去分詞という明示的な動作受動が出現してきたとされる⁸⁾。これに対して *werden* が保持され続けたドイツ語では、それが初期の起動的 (*ingressiv*) な意味を徐々に失い、以前にはみられなかった新しい機能として受動を表現するようになっていった。その際、まず (3a) のような一般的陳述、つまり個々の出来事とは無関係な一般論を述べる用法が定着し、次いで (3b) のような個別の事態を表す用法が浸透した⁹⁾。他方、本来は無標の受動形式であった *sein+* 過去分詞は、初期新高ドイツ語期になお (4) のような

現代語にはもはやみられない用法を残しつつも、中高ドイツ語の後期には werden 受動との役割交代をほぼ終えていたのである。今日、なお Sei gegrüßt. のようなイディオムに未完了相の動詞が sein と共起する例がみられるが、これは sein が動作受動を表していた時代の名残りである¹⁰⁾。

- (3) a. alle sunda uerdent fertiligôt in touffi. (Valentin 1987: 11)
 b. ez was uns baiden vil laid, daz wirt dir von unz wol gesait. (Valentin 1987: 12)
- (4) Ich acht wol solcher mein radschlag sey auffs allertorlichst angesehen. (Eroms 1992:238)

こうした歴史的経緯を真摯に受けとめるならば、状態受動を単にそれが局所現象になりつつあるという理由だけで看過すべきでないことは明らかである。英語の発展状況が端的に示す通り、とくに態のような言語の本質に関わる現象の場合、補充形式を拡張させるなどの方策によりシステムは言語相互に調和がとれていると考えられるが、このことからすれば sein+過去分詞がドイツ語の受動体系の中でなんらかの役割を果たしていることは疑いない。さらに、現代語における werden の優位は事実としても、現在の werden/sein の分布がもはや動かし難い最終段階にあるとは考えにくく、ましてやノルウェー語やオランダ語における状態受動と動作受動完了形の接近をみれば（詳細次節）、いわゆる6時制をほぼ完全な体系として保つドイツ語に体系崩壊という次の段階を想定することもあながち不可能ではない。以下、2節では状態受動と動作受動完了形の混用についてこれまでの文献で指摘されている事実を確認し、あわせていくつかの対照言語学的データを観察する。次いで3節では、まず状態受動とそれに似た表層を持つ sein 文との境界を画定し（3.1.節）、本稿で問題にすべき状態受動のタイプとその動作受動完了形への接近の可否を検証する（3.2.節）。4節はまとめである。

なお、3.1. 節で扱う境界画定プロセスには、Syntax と Lexikon または LCS の関係を考えた場合、状態受動にも (covert な) 外項の存在を想定してよいか、という問いが未解決のまま残されている。つまり、状態受動は実は受動文ではなく単なる形容詞文に過ぎないのではないかという問いである。これに対して本稿は状態受動をあくまでも受動文と捉え、その過去分詞のステータスには動詞・形容詞間を推移する一定のグラデーションを認める立場をとる。他のゲルマン語の等価物に比して、ドイツ語の sein+ 過去分詞だけをとくに形容詞文とする強い根拠が見当たらないためである。例えば、古形をよく保持しているアイスランド語 (受動の基本構造は vera (=sein) + 過去分詞) では、対格目的語を選択する (5) のような動詞の場合、同一形式が動作受動と状態受動の間で二義的な解釈を持つものの、与格目的語を選択する動詞の一部では (6) (7) のように両者の形式が異なることがある。このとき動作表現 (6) では、ドイツ語の自動詞の受動態がそうであるように与格目的語がそのまま文中に残り、過去分詞は一律に3人称・単数・中性形となる。他方、状態表現 (7) では当該の与格が受動文の主語として主格で現れ、動詞もその数に合わせて人称変化し、かつ、過去分詞はこの主語に性・数・格を一致させる。これはまさに形容詞文の構造である¹¹⁾。仮にドイツ語の sein+ 過去分詞がこのような段階にあれば、それは形容詞文に等しく、したがって外項は covert な形でも存在しないと言えよう。

- (5) Húsið var byggt úr steini. (森田 2002:158) 二義的解釈
(Haus-DET-Nom.sg. sein-3.sg.past. bauen-pp.neut.sg. aus Stein-Dat.)
- (6) a. Dyrunum var lokað. (森田 2002:159) 動作受動
(Tür-DET-Dat.pl. sein-3.sg.past schließen-pp.neut.sg.)
- b. Úrinu var stolið. (ebd.) 動作受動
(Taschenuhr-DET-Dat.sg. sein-3.sg.past stehlen-pp.neut.sg.)
- c. Mér var boðið. (ebd.) 動作受動

(Ich-Dat. sein-3.sg.past einladen-pp.neut.sg.)

- (7) a. Dymnar voru lokaðar. (ebd.) 状態受動
 (Tür-DET-Nom.pl. sein-3.pl.past schließen-pp.fem.pl.)
 b. Úrið var stolið. (ebd.) 状態受動
 (Taschenuhr-DET-Nom.sg. sein-3.sg.past stehlen-pp.neut.sg.)
 c. Ég var boðinn. (ebd.) 状態受動
 (Ich-Nom. sein-3.sg.past einladen-pp.mask.sg.)

しかし、ドイツ語の sein+ 過去分詞はこのような段階にない。単に過去分詞の性の区別や主語と述語形容詞の文法的な一致が消失しているのみならず、能動態の与格が受動態の主格に変換されることもない。受動文の主格はあくまでも能動文の対格、それも当該の動詞に選択制限された対格目的語でなければならない(→例文(8)から(11)の locative alternation を参照)。主語に意味的な制約がまったく存在しない形容詞文と大きく異なるところである(→例文(12))。

- (8) a. Man hat Kohle auf den LKW geladen.
 b. Kohle ist schon geladen.
 c. *Der LKW ist schon geladen.
- (9) a. Man hat den LKW mit Kohle beladen.
 b. Der LKW ist schon beladen.
 c. *Kohle ist schon beladen.
- (10) a. Man hat verschiedene Szenen an die Berliner Mauer gemalt.
 b. Verschiedene Szenen sind schon gemalt.
 c. *Die Berliner Mauer ist schon gemalt.
- (11) a. Man hat die Berliner Mauer mit verschiedenen Szenen bemalt.
 b. Die Berliner Mauer ist schon bemalt.
 c. *Verschiedene Szenen sind schon bemalt.

(12) Kohle/Der LKW/Die Szene/Die Mauer ist schmutzig.

2.

状態受動が単なる sein 文の領域を越え、能動態および動作受動にならぶ態の一つと認知されたのは Glinz (1952) 以降だといわれるが、そもそも Glinz がそうした見解に立ち至った背景には、例えば次のようなそれ以前の文法家の状態受動に対する言語理解がある¹²⁾。

- (13) ...doch unterbleibt das *worden*, auch im wirklichen passiven fall, überall wenn durch das prät. nicht das vorübergehen, sondern das *fortdauern* eines bewirkten zustandes dargestellt wird, z. b. man fragt: der feind ist geschlagen, der könig zieht als sieger heim; ... sobald aber der zustand aufgehört hat, ist das *worden* unentbehrlich, z. b. ich bin oft verleumdet worden, und habe geschwiegen...(Grimm 1898: 17)
- (14) *Er ist gezwungen worden* bezeichnet eine Handlung der Vergangenheit, *Er ist gezwungen gewesen* einen Zustand der Vergangenheit, *Er ist gezwungen* kann beides bezeichnen. — Unhistorisch, aber dem jetzigen Sprachgefühl entsprechend könnte man sagen: ‘Wir bilden das Passivum mit *werden*, können aber in den Formen der Vergangenheit *worden* fortlassen’. (Wilmanns 1906: 141)

このような記述にどの程度の説明的妥当性があるかは別に、まず正確な発展の経緯をみれば、worden の出現は明らかに sein/werden のそれよりも遅く、従って状態受動が動作受動完了形から worden の省略により生じたという事実はない。古高ドイツ語の受動形式は wësan/wërdan+ 過去分詞という単純な結合に限られていて 13 世紀以前には worden を含む完了形の例証がないという報告¹³⁾、またルター聖書に現れる worden ist はもっぱら名詞もしくは形容詞と結んでおり過去分詞と共起する例は存在しないと

いう指摘¹⁴⁾ (→例文 (15)), さらに受動態の完了形は 15 世紀のテキスト (Chronik des Constanzer Konzils) で初めて出現したという記述¹⁵⁾ (→例文 (16)) などを考え合わせれば, 完了形への worden の使用が一般化したのは早くとも 13 ~ 14 世紀以降である。

- (15) a. er ist dein knecht worden. (Grimm 1898: 16)
 b. er ist reich worden. (ebd.)
- (16) a. als nun all sprachen dieser welt zertailt worden sind. (Valentin 1987: 12)
 b. (der Papst) der ze Costenz erwellet was worden. (ebd.)

状態受動が動作受動完了形と等価でないことは, 次のような現代語の例からも観察される。まず (17) が示す通り, 状態受動は継続的な意味を表す副詞と共起可能であるが, 動作受動完了形ではそれが許容されない¹⁶⁾。同様に, 現在との関わり, つまり達成された状態を変更可能とみるか否かについて, 状態受動と動作受動完了形には異なった含意が存在する (→例文 (18))。

- (17) a. Die Tür ist seit 3 Tagen geöffnet.
 b. *Die Tür ist seit 3 Tagen geöffnet worden.
- (18) a. *Die Tür ist geschlossen, aber Hans hat sie wieder geöffnet. (Thieroff 1994: 38)
 b. Die Tür ist geschlossen worden, aber Hans hat sie wieder geöffnet. (ebd.)

また, 同じ sein+ 過去分詞でありながら (19) のように werden と同時制で用いられ, かつ, ほぼ等しい意味を表す文タイプも少なくない¹⁷⁾。

- (19) a. Die Stadt wird/ist von 3 Mio. Menschen bewohnt.
 b. Die Lampe wird/ist von einem starken Haken gehalten. (Höhle 1978: 42)

さらに、(20) が示すように im Augenblick や morgen など現在・未来の一時点を表す副詞はもっぱら状態受動にのみ生起可能であり、(21) のような状態受動それ自体の完了形に worden を加えたいわゆる二重完了は、局所的な方言を除いて非文である¹⁸⁾ (→例文 (22))。

- (20) a. Im Augenblick ist die Straße von Schneemassen blockiert (*worden).
 (Höhle 1978: 42)
 b. Morgen ist der Damm errichtet (*worden). (ibd.)
- (21) a. Die Straßen sind von Schneemassen blockiert gewesen. (Höhle 1978: 43)
 b. Noch ehe diese Fragen völlig geklärt gewesen waren. (ibd.)
- (22) a. *Die Straßen sind blockiert worden gewesen. (ibd.)
 b. *Noch ehe diese Fragen völlig geklärt worden gewesen waren. (ibd.)

上記 (15) から (22) にみたすべての事実は、状態受動と動作受動完了形が本質的に異なるものであることを示唆している。しかし、それにもかかわらず興味深いのは、前述の Grimm や Wilmanns からほぼ 1 世紀を経ようとしている現在の文法記述が、(少なくとも状態受動を説き起こす手掛かりとして) なおこの両者の類似性に言及している点である。例えば Helbig/Buscha (1986⁹⁾: 175) は「動作受動完了形から worden を削除したものは形態的に状態受動と同形になるため混用が生じることがある」とし、Admoni (1970:175) は「そうした接触が起こるのは完了形そのものがある種の結果性を含意するため (resultativ, perfektiv gefärbt) である」と述べて

いる。また、規範的な Duden は (23) のような例を挙げ「本来あるべき worden が欠落しているこの種の文は誤用である」と断じているが、これは逆に当該の混用が少なくとも日常的な言語使用では一定の範囲にまで及んでいることを裏付ける記述である。

- (23) a. Die Sperre ist heute wieder aufgehoben. (Duden Bd.4 1995⁵: 183/Bd.9 1985³: 796)
- b. Der Ausbrecher ist heute wieder gefaßt. (ebd.)

状態受動が動作受動完了形から生じたものではないという歴史的事実と、しかしながら両者は混用されるという実際の言語使用は、さらに以下 (24) のような対象言語学的データを重ね合わせると、より複雑な様相を呈してくる¹⁹⁾。

- (24) Thieroff (1994: 56, VP=Vorgangspassiv / ZP=Zustandspassiv)

Stufe	Beschreibung des Systems	Status von 'sein'+ Partizip II	Sprachen
1	keine Opposition VP-ZP (nur VP)	Perfekt-Tempora	Lateinisch
2	1 Form für VP und ZP	ambig (VP und ZP)	Französisch, Isländisch
3	unmarkierte Form (VP/ZP) vs. VP-Form	ambig (VP und ZP)	Italienisch, Englisch
4	VP-Form vs. ZP-Form, telisch und atelisch	nur ZP	Spanisch/Portugiesisch Deutsch/Dänisch
5	wie 4, aber keine Opposition VP-Perf-ZP-Präs bei telischen Verben	ZP (telisch + atelisch) und Perfekt-Tempora telischer Verben	Norwegisch
6	wie 4, aber keine Opposition VP-Perf-ZP-Präs	ZP und Perfekt-Tempora	Niederländisch
7	=1	=1	?

- (24) はいくつかのロマンス系およびゲルマン系の言語について受動体

系のありかたと be-passive の機能を比較し、それを文法化が最も未発達な段階 1 (VP / ZP の対立がなく、sein+ 過去分詞が完了時制を表す段階) から、逆に脱文法化が最も進んだ段階 6 (VP の完了形と ZP の現在形が同形になり、sein+ 過去分詞が ZP と完了時制のどちらをも表し得る段階) にまで区分したものである。ドイツ語 (およびスペイン語、ポルトガル語、デンマーク語) が所属する段階 4 は、telisch/atelisch な動詞²⁰⁾ のそれぞれについて独立した VP/ZP が存在し、sein+ 過去分詞は ZP のみを表すことが示されているが、システム全体としてみればこれが最も完全、かつ最も細分化された状態であり、これ以前の段階 1, 2, 3 は体系がそうした間隙のないパラダイムに向けて文法化されていく過程、逆にこれ以降の段階 5, 6 はそれを脱文法化していく過程と位置づけられる。そしてこの脱文法化の過程こそが、まさに本稿で扱う状態受動と動作受動完了形の競合にほかならないのである。

- (25) a. Die Stadt **ist** dreimal von den Römern erobert worden. (Thieroff 1994: 51)
 b. Byen **er** tre gange **blevet** erobret af romerne. (ebd.)
 c. Byen **er** tre ganger [**ø**] erobret av romerne.(ebd.: [**ø**] 挿入は筆者)

上例 (25) は「その町はローマ人によって三度征服された」という文をドイツ語、デンマーク語、ノルウェー語の順に記したものであるが、dreimal という頻度副詞の存在により一義的に動作受動の読みしか持ち得ないこの文は、段階 4 のドイツ語とデンマーク語で worden/blevet が義務的であるのに対して、段階 5 のノルウェー語では blitt を省略することができる。つまり、ノルウェー語では Byen er erobret. のような be-passive が状態受動 (Die Stadt ist erobert.) と動作受動完了形 (Die Stadt ist erobert worden.) をともに意味するのである²¹⁾。ところが、この二義性は実際には telisch な動詞の現在形と過去形 (= 動作受動の時制でいえば現在完了形と過去完了

形)でのみ観察され、それ以外の動詞、もしくは時制では生じない。従って、例えば *elske* (=lieben) という atelisch な動詞の場合、動作受動完了形から *blitt* が省略されることはない (→例文 (26))。

- (26) a. Han er elsket. (Thieroff 1994: 52) 状態受動現在形 : Er ist geliebt.
 b. Han er **blitt** elsket. (ebd.) 動作受動現在完了形 : Er ist geliebt worden.

これに対して段階 6 に所属するオランダ語ではさらに進んだ混用が観察される。

- (27) a. De deur is geverfd. (Thieroff 1994: 53)
 b. Die Tür ist gestrichen.
 c. Die Tür ist gestrichen worden.
 d. *De deur is geverfd geworden.

まず、(27a) のような telisch な be-passive の読みは、ノルウェー語の *Byen er erobret.* と同様に、状態受動と動作受動完了形の間で曖昧である (→例文 (27b) (27c))。しかし、オランダ語にみられるこの現象はノルウェー語のように *blitt* が省略されて生じた結果ではない。(27d) が示す通り、現代オランダ語では *geworden* (=worden) そのものが非文、つまり、すでに消滅しているのである。動作受動完了形を形成するための過去分詞がもはや存在しないというこの事実は、当然の帰結として、当該の競合が他のすべての領域に及んでいることを予測させる。そして実際に atelisch な動詞の be-passive は、(28a) のような単純文脈中で状態受動の読みがなお支配的であるものの (→例文 (28b)), (28c) のように適切な副詞を共起させれば動作受動完了形としての解釈が可能になるのである (→例文(28d))。

- (28) a. De misdadiger is gezocht. (Thieroff 1994: 54)

- b. Der Verbrecher ist gesucht. (ebd.)
 c. De misdadiger is al vaker gezocht. (ebd.)
 d. Der Verbrecher ist schon öfter gesucht worden. (ebd.)

状態受動と動作受動完了形の混用はすなわち、(i) 現代ドイツ語が以下(29)のような完全に細分化されたパラダイムを有するのに対して、(ii) 次段階のノルウェー語ではこの中の(a)―(b) および (c)―(d) の対立が be-passive によって解消されてもよく、(iii) さらに脱文法化が進んだオランダ語では (k)―(l) に至るすべての対立が唯一 be-passive という手段で表現されなければならないのである。

(29)

	Telisch		Atelisch	
	動作受動	状態受動	動作受動	状態受動
現在形	wird geöffnet	ist geöffnet (a)	wird repräsentiert	ist repräsentiert (g)
現在完了形	ist geöffnet worden (b)	ist geöffnet gewesen	ist repräsentiert worden (h)	ist repräsentiert gewesen
過去形	wurde geöffnet	war geöffnet (c)	wurde repräsentiert	war repräsentiert (i)
過去完了形	war geöffnet worden (d)	war geöffnet gewesen	war repräsentiert worden (j)	war repräsentiert gewesen
未来形	wird geöffnet werden	wird geöffnet sein (e)	wird repräsentiert werden	wird repräsentiert sein (k)
未来完了形	wird geöffnet worden sein (f)	wird geöffnet gewesen sein	wird repräsentiert worden sein (l)	wird repräsentiert gewesen sein

果たして現代ドイツ語の状態受動にはこのような体系崩壊をうかがわせる手掛かりが存在するのであろうか。

3.

3.1.

ドイツ語の状態受動の詳細を検証する前に、ここでは同じ sein+ 過去分詞という表層を持ちながら状態受動とは異なる現象をいくつか観察する。具体的には述語形容詞を含むコブラ文、状態再帰構文、および sein 支配の完了形である。これらの sein 文と状態受動との違いは、一見、自明であるかのようにも見えるが、実際の境界は必ずしも明確ではなく、ことに文脈を捨象して提示した場合、それぞれの文が特定のカテゴリーに唯一的に分類されるとは限らない。これは過去分詞が場合により形容詞的な性質を示すためであり、状態再帰構文の読みがいわゆる *unechtes Reflexiv*²²⁾ で二義的になるためであり、また sein 支配の自動詞の一部が他動詞用法をも併せ持つためである。しかし、仮に状態受動らしい構造が存在するとしても、それが単純な sein+ 過去分詞と複合的な sein+ 過去分詞 +worden をともに許容しなければ、そこに状態受動と動作受動完了形の接近の可能性をみることはできない。換言すれば、任意の sein 文に前節で述べたような発展が生じるためには、その文が同時に *worden* を用いた完了形を形成しなければならないのである。

これを端的に示しているのが以下 (30) のような sein 文である。ここに挙げた三例は a. 文の *angemessen* では過去分詞の意味が不定詞から推測不可能であるという理由、b. 文の *begabt* では不定詞がほとんど用いられないという理由、c. 文の *gefragt* では対応する動作受動と格関係が一致しない (**Der Artikel wird gefragt. / Nach dem Artikel wird gefragt.*) という理由から、それぞれ状態受動というよりはむしろ述語形容詞が sein と結んだコブラ文である²³⁾。そのため *worden* による完了形は形成されず、結果、これらの文で当該の混用はまずもって問題にならないことになる。

(30) a. Die Belohnung ist ihm angemessen (*worden).

- b. Er ist für Sprachen sehr begabt (*worden).
- c. Der Artikel ist gefragt (*worden).

sein 文に現れる過去分詞はこうした完全に形容詞化したタイプを除いて、文脈の影響から時に形容詞的、時に動詞的な振舞いをするが、同一の過去分詞が示すこの階層的な分布は例えば以下 (31) のように文中に異なる要素を配し、各文の容認度を比較することでその一端を観察することができる。ここで動作主を表す前置詞句 (= von Maja) は過去分詞が動詞的であることを示す指標、接頭辞 un- はそれが形容詞的であることを示す指標である。そして Lenz (1993: 39f.) に従えば、(31a) のような動作主項を含む sein 文は相応する動作受動 (31b) とならんで最も動詞的な段階に位置し、逆に (31c) のように un- が付加された sein 文はその対極、つまり最も形容詞的な領域に位置することになる。他方、動作主項と un- をともに含む (31d) は中間的な存在で、このままでは文法性がやや劣るものの、(31e) のように noch を共起させることで完全に適格な文になるとされる。また、(31f) のように二つの指標が werden 文に現れたものは非文、(31g) のように指標が生起していない文は曖昧である。つまり、過去分詞とは間品詞的な存在であるがゆえに単独で特定の色彩を帯びることがなく、他の要素の働きによりはじめて形容詞と動詞のスケール上を移動するが、その一方でこの両者の性質を同時に満たすことはできないのである²⁴⁾。

- (31) a. Das Beet ist von Maja bepflanzt. (Lenz 1993: 44)
- b. Das Beet wird von Maja bepflanzt. (ebd.)
- c. Das Beet ist unbepflanzt. (ebd.)
- d. ? Das Beet ist von Maja unbepflanzt. (ebd.)
- e. Das Beet ist von Maja noch unbepflanzt. (ebd.)
- f. * Das Beet wird von Maja unbepflanzt. (ebd.)
- g. Das Beet ist bepflanzt. (ebd.)

ここで上記 a., c., e., g. についてその完了形のありかたをみると、結果は以下に示す通り、a. 文では *worden*, c. 文と e. 文では *gewesen*, g. 文では *worden* と *gewesen* がともに許容される。これは過去分詞のステータスからすれば上述の Lenz の見解を概ね裏付けるものであるが、こと状態受動と動作受動完了形の競合に関していえば、議論の対象となり得るものが a. 文と g. 文に限られることを示すデータである。すなわち、*worden* による完了形が可能な a./g. 文には当該の混用の可能性が残されているが、それを許さない c./e. 文はさきの (30) と同様、述語形容詞が *sein* と結んだコブラ文なのである。

- (32) a'. Das Beet ist von Maja bepflanzt worden/*geworden/*gewesen.
 c'. Das Beet ist unbepflanzt *worden/*geworden/gewesen.
 e'. Das Beet ist von Maja noch unbepflanzt *worden/*geworden/gewesen.
 g'. Das Beet ist bepflanzt worden/*geworden/gewesen.

過去分詞が形容詞的であることを示す指標としては、ほかに *genug* (後置) や *zu* (=too) のような強意副詞、ならびに比較変化の可否などが考えられるが、過去分詞の間にはこうした条件下でもある種の対立が生じ、例えば (33) のようにそれらの指標を許さないタイプと、ほぼ同じ文脈にありながらそれを問題なく許容するタイプとが存在する (→例文 (34))。

- (33) a. *Die Tür ist (von Peter) schon geschlossen genug.
 b. *Die Tür ist (von Peter) zu geschlossen, als daß man sie wieder aufmachen könnte.
 c. *Die Tür ist geschlossener als es notwendig ist.
- (34) a. Die Schüler sind (durch das tägliche Pensum) schon belastet genug.

(Bryan 1995: 68)

- b. Die Schüler sind (durch das tägliche Pensum) zu belastet, als daß sie ihre Freiheit genießen könnten.
- c. Die Schüler sind jetzt noch viel belasteter, als sie es vor 20 Jahren waren.

しかし、このような場合も可能な完了形の構造を観察すれば、(35)が示す通り、上の文の belastet が持つ述語形容詞的な価値が容易に確認される²⁵⁾。総じていえば、任意の過去分詞はそれが形容詞的か動詞的かに関していかに曖昧な位置づけにあらうとも、worden による完了形を形成しない限り、そこに状態受動と動作受動完了形の競合を想定することはできないのである。

- (35) a. Die Schüler sind schon belastet genug ?worden/*geworden/gewesen.
- b. Die Schüler sind zu belastet *worden/*geworden/gewesen.
- c. Die Schüler sind jetzt noch viel belasteter *worden/geworden/gewesen.

こうした考え方はまた、状態受動と状態再帰構文の境界、ならびに状態受動と sein 支配の完了形との境界を確定する際にも有用である²⁶⁾。

- (36) a. Das Mädchen ist hoffnungslos verliebt.
- b. Peter ist sehr gut erholt.
- c. Unsere Tochter ist oft erkältet.

まず上記(36)のような状態再帰構文は、とくに sein+ 過去分詞という形式により先行するプロセスから生じる結果状態を表す点で状態受動と共通した意味機能を持つが、これを能動態へ還元した場合、可能な形は(37)

のような再帰動詞で, (38) のような他動詞ではない。従って *worden* による完了形は形成されず (→例文 (39)), 結果, 少なくとも (36) のような *echtes Reflexiv* には動作受動完了形との競合を全く望めないことになる。

- (37) a. Das Mädchen hat sich hoffnungslos verliebt.
 b. Peter hat sich sehr gut erholt.
 c. Unsere Tochter hat sich oft erkältet.
- (38) a. *Jemand hat das Mädchen hoffnungslos verliebt.
 b. *Jemand hat Peter sehr gut erholt.
 c. *Jemand hat unsere Tochter oft erkältet.
- (39) a. *Das Mädchen ist hoffnungslos verliebt worden.
 b. *Peter ist sehr gut erholt worden.
 c. *Unsere Tochter ist oft erkältet worden.

ところが再帰代名詞が *unecht* である場合, 基底に考えられる能動態の構造は二種類で, 表層は (36) のような *sein* 文であっても部分的に状態受動と接触する領域が生じてくる。

- (40) a. Das Kind ist frisch gewaschen.
 b. Der Student ist gut informiert.
- (41) a. Das Kind hat sich frisch gewaschen.
 b. Der Student hat sich gut informiert.
- (42) a. Jemand hat das Kind frisch gewaschen.
 b. Jemand hat den Studenten gut informiert.

上例が示す通り, *unechtes Reflexiv* が形成する状態再帰構文 (40) は特定の文脈がない限りその読みが曖昧で, 対応する能動態としては (41) のような再帰動詞と (42) のような他動詞がともに想定される。つまり, (40a)

であれば子供の身体を洗ったのは本人でも他人でもよく, (40b) であれば学生がその知的段階に達したのは本人が勉強した結果でも他人が情報を提供したためでもよいのである。これは当該の再帰代名詞が他動詞目的語のパラダイムの一部として用いられていることに起因する現象であるが, このうちの他動詞文 (42) は以下 (43) のように worden による受動態を形成する。このことからして unechtes Reflexiv による sein 文は, 先行文脈中にその文の主語以外の動作主が含意されるならば, 動作受動完了形への接近が可能だということになる。

- (43) a. Das Kind ist frisch gewaschen worden.
b. Der Student ist gut informiert worden.

なお, 同じ waschen を用いた sein 文でも (44a) のような例はそれを (44b) のような再帰動詞に還元することができない。これは主語の意味素性 [-belebt] が動詞の選択制限に合致しないためである。従って, この種の sein 文は一義的に状態受動である。また, (45) にみられるように, 対格の再帰代名詞と結ぶ再帰動詞はすべてが状態再帰構文を形成するわけではない。さらに再帰代名詞が与格の場合 (→例文 (46)), もしくは前置詞に支配されている場合 (→例文 (47)), 状態再帰構文はそもそも非文である²⁷⁾。

- (44) a. Das Hemd ist frisch gewaschen.
b. *Das Hemd hat sich frisch gewaschen.
(45) a. Ich habe mich sehr beeilt.
b. *Ich bin sehr beeilt.
(46) a. Du schadest dir damit nur selbst.
b. *Du bist damit nur selbst geschadet.
c. *Dir ist damit nur selbst geschadet.
(47) a. Peter hält immer an sich.

- b. *Peter ist immer an sich gehalten.
- c. *An sich ist immer gehalten.

これら状態再帰構文とならんで、一つの動詞が複数の語義を持つためにその一部が状態受動と解される構造として、さらに sein 支配の自動詞による完了形を挙げることができる。sein 支配の完了形は本来「～した状態で存在する」という原義を持ち、文脈により今日なお (48) のような結果状態を含意することがあるが²⁸⁾、こと受動態に関していえば、状態受動はもとより動作受動の形成さえも許容しない (→例文 (49) (50))。これらの sein+ 過去分詞は、通常、一義的に能動態の完了形である (→例文 (51))。

- (48) Die Blume ist seit Stunden aufgeblüht.
- (49) a. Peter ist in München angekommen.
- b. Die Kinder sind sofort eingeschlafen.
- (50) a. *In München wird angekommen.
- b. *Sofort wird eingeschlafen.
- (51) a. *Peter ist in München angekommen worden.
- b. *Die Kinder sind sofort eingeschlafen worden.

ところが、次のような sein+ 過去分詞はその読みが二義的で、事態の完了が表明されているのか、先行するプロセスから生じる結果状態が描写されているのか曖昧である。

- (52) a. Sein Bruder ist verzogen.
- b. Alle sind durchgegangen.
- c. Der Zweig ist abgebrochen.

(52) は a. 文が引っ越したとわがままに育てられた、b. 文が通過したと

点検された, c. 文が折れたと折られたの意であるが, この場合, 前者は自動詞の完了形, 後者は他動詞の状態受動である。そして, 少なくとも状態受動としての意味が読み込める際には, それぞれの語義に個別の辞書登録が必要か否かという問題とは別に, worden を用いた完了形が形成される(→例文 (53))。従って sein 支配の自動詞による sein+ 過去分詞は, 頻度からすれば能動態の完了形であることが圧倒的に多いものの, その動詞が同時に他動詞用法をも兼ね備えている場合には, 状態受動と動作受動完了形の競合が可能だということになる。

- (53) a. Sein Bruder ist von der Stiefmutter verzogen worden.
 b. Alle (Listen) sind sorgfältig durchgegangen worden.
 c. Der Zweig ist von jemand abgebrochen worden.

述語形容詞を含むコプラ文, 状態再帰構文, sein 支配の完了形は, このようにいずれも sein+ 過去分詞という形式を持ち, たとえ部分的にはあれ, ある種の結果状態を含蓄する。そのためこれらの文と状態受動の間には形式面のみならず機能面においても重複領域が生じ, ことに明示的な文脈が提示されなければ, 相互の峻別が困難である場合も少なくない。しかし, 任意の sein 文がさらに動作受動完了形とまで競合可能か否かという点をみれば, 実際にそのような発展が生じるためには, 少なくとも同じ sein 文が同時に worden を用いた完了形を形成する必要がある。この意味で単に現象間の境界が不確定であるという事実は, 各文の完了形のあり方が確認される範囲において, 本稿の議論に重大な影響を及ぼすものではない。

3.2.

こうした前提のもとに現在の状態受動のありかたをさらに細かく検証すると, その形成に課される意味的・構造的な制約と密接に関連して, 動作受動完了形への接近が疑われる領域がいくつか考えられることが分かる。

その一つは、以下 (54) に挙げる不可視の結果状態を表す動詞群である。

- (54) a. Die Katze ist schon gestreichelt. (Kratzer 2000: 388)
 b. Dieser Kinderwagen ist schon geschoben. (ebd.)

一般に状態受動は完了相の他動詞を用い、対象物の置かれる新たな状態ないしは性質が明確に示されるほど形成が容易であるとされるが²⁹⁾、同じ完了相の他動詞でありながら上例の *streicheln* や *schieben* の場合、その目的語に目に見える形での結果状態を想定することは難しい。例えば何かが開いた (*geöffnet*) 状態や破壊された (*zerstört*) 状態とは異なり、なでられた猫や押されたベビーカーには、通常、その行為の前後で対象物の外見に顕著な変化がみられないためである。この種の状態受動はもとよりマージナルな存在で、先行研究の中にはこれをそもそも非文とする向きもあるが³⁰⁾、Kratzer (2000) によれば、(54a) は旅行に出た隣人から猫を預かった際、1日に1回その猫をなでるように頼まれた状況で、(54b) は生産されたベビーカーの車輪の具合をテストするため、出来上がった製品を2~3度押してみることが仕事である状況でそれぞれ十分に発話可能であるという。ここで問題は、このようなタイプの状態受動が、まさにその結果が不可視であるという理由から、ときに動作受動完了形の代用と解釈されることである。事実、Terakado (2001) は以下 (55) の各文を、それが (56) にみる能動態の完了形と完全に同意であるとして、「実質的には動作受動の現在完了の意味で用いられたもの」と断定している。(55) の過去分詞はそれぞれ (第一歩が) 踏み出されたこと、(候補者が) 見出されたこと、(基礎が) 築かれたことを示しているが、この結果状態のありかたは当該の対象物に現れる外見上の変化からすれば、すべて不可視である。

- (55) a. Der erste Schritt ist getan.
 b. Ein idealer Kandidat ist schon gefunden.

- c. Die Grundlage dafür ist schon gelegt.
- (56) a. Man hat den ersten Schritt getan.
 b. Man hat schon einen idealen Kandidaten gefunden.
 c. Man hat längst die Grundlage dafür gelegt.

ここで仮に (55) に動作受動完了形の代用としての機能があるならば、そこには動作受動に特徴的な頻度副詞や時の副詞が生起してしかるべきである (Die Tür ist *dreimal/vor 2 Monaten* geschlossen worden.)。しかし、そのような副詞類の出現は (55) のみならず (54) においてもまったく許容されない (→例文 (57))。これらの文には特定の一時点を指示する読みが欠けているのである。また、(18) で述べたように動作受動完了形ではいったん達成された結果を後に変更することが可能であるが、例えば (55b) や (55c) はいかなる状況においても、見出された候補者がいなくなったことや築かれた基礎が取り壊されたことを含意しない。とすれば、対象物への影響が希薄な動詞による状態受動は、いかに動作受動完了形に近いという印象を与えようとも、実際には行為の完了に主眼を置いたものではなく、あくまでも不可視の結果状態を描写する手段だということになる。つまり、適切な文脈が整えば、なでられた猫はなでられたままの状態を保ち、見出された候補者はそのまま候補者の状態であり続けるのである³¹⁾。この意味で (54) や (55) の状態受動は動作受動完了形と競合する段階に至っていない。

- (57) a. *Die Katze ist schon dreimal gestreichelt.
 b. *Dieser Kinderwagen ist schon dreimal geschoben.
 c. *Der erste Schritt ist schon vor 2 Monaten getan.
 d. *Ein idealer Kandidat ist schon vor 3 Wochen gefunden.
 e. *Die Grundlage dafür ist schon vor Jahren gelegt.

次に、状態受動と動作受動完了形の接近が疑われる第二のタイプは以下のような強い Telizität を示す文である。

- (58) a. Das Interview ist damit beendet.
 b. Die Verhandlung ist geschlossen.
 c. 39 Minuten sind gespielt.

用語 *telisch* の使用に斉一性がないことはすでに触れたが (→注 20)), ここでいう強い Telizität とは、概略、「これをもって〜し終えたことになる」という発話時における事態の完了を表す文意のことである。この意味は例えば会見の終了 (58a) や閉廷の宣言 (58b), あるいは経過時間の記述 (58c) などではほぼ必然的に生じるが、「インタビューを終わります」、「これで閉廷します」、「ちょうど 39 分が経過しました」などの日本語に対応するこうした状況には、上例のように状態受動を用いた表現がすでに慣用的に定着していることが少なくない。これは Telizität と状態受動がきわめて密接な関係にあること、換言すれば、当該の文から *telisch* な状況が予測されるほど状態受動が容易に形成されることを示すものである。実際、語彙的に *telisch* な動詞が状態受動に多く出現するのはもちろんのこと (→例文 (59)), 通常は状態受動を形成し難いとされる自動詞も³²⁾、文全体に強い Telizität が読み込める際には例外的にそれが可能となる (→例文 (60))。

- (59) a. Das Problem ist nun ausdiskutiert.
 b. Der Strauß ist nun ausgefochten.
 (60) a. *Es ist getanzt/geschlafen/diskutiert.
 b. Nun ist genug getanzt/geschlafen/diskutiert.
 c. Jetzt ist ausgetanzt/ausgeschlafen/ausdiskutiert.

この傾向はさらに、*atelisch* もしくは必ずしも一義的に *telisch* とはいえ

ない動詞にも観察される。以下 (61) にみる未完了相の動詞, および (62) にみる瞬間相の動詞は, その語彙的な性質から単純時制の能動態では完了の意を担う副詞と共に起できないが (→例文 (61b) (62b)), 強い Telizität を伴う状態受動か複合時制であればそれが問題なく許容される (→例文 (61a/c) (62a/c))。つまりここには, 局所的ではあるが, 状態受動と完了時制だけに許される排他的な意味の領域が存在するのである。

- (61) a. In drei Stunden war das Problem besprochen. (Zifonun/Hoffmann/
Strecker 1997: 1814)
- b. *Man sprach das Problem in drei Stunden. (Zifonun/Hoffmann/
Strecker 1997: 1813)
- c. Man hat/hatte das Problem in drei Stunden besprochen.
- (62) a. In drei Minuten war er gefunden/entdeckt. (Zifonun/Hoffmann/
Strecker 1997: 1814)
- b. ?In drei Minuten fand/entdeckte man ihn. (ebd.)
- c. In drei Minuten hat/hatte man ihn gefunden/entdeckt.

ところが, こうした強い Telizität を示す状態受動がその能動態の完了形に対して持つ関係をそれ以外の状態受動の場合と比較すると, そこには観察時からみた行為の完了およびその後続状態の把握に関して, 微細な, しかしながら非常に重要な相違が認められる。まず, 一般に状態受動の典型とされている (63a) は行為 (63b) の完了後に生じる結果状態を描写するもので, 観察時からすれば行為の完了と状態受動の発話の間には, 当該の状態が継続している限り, 理論的にはどれだけ時間が経過していてもよい。従って例えば (63) では, ドアが開けられた後, 1 週間してなおそれが開いたままであることも可能である。これに対して telisch な状態受動 (64a) は, 確かに行為 (64b) の完了を前提としてはいるが, この行為の完了と実際の状態受動の発話とは時間的に離れてはならず, むしろ同時に,

いわば (64a) の中に一体化していなければならない。(64a) が発話可能な瞬間は当該の問題が十分に議論し尽くされた (と話者が判断する) ちょうどその時に限られているのである。

- (63) a. Die Tür ist geöffnet.
 b. Man hat die Tür geöffnet.
- (64) a. Das Problem ist nun ausdiskutiert.
 b. Man hat das Problem ausdiskutiert.

このような行為の完了と発話の一体化は、(60b) や (64a) の nun, あるいは (60c) の jetzt などがある意味でそれを物語っているが、ここで逆に、そうした副詞類を含む内容が動作受動完了形で表現可能か否かをみると、結果は (65) のように非文となるか、もしくは (66) のように状態受動とは異なった解釈を受ける。(65) は特定の状況で慣用的に用いられる状態受動 (58) に worden を付加したものであるが、これらの文は行為の当事者の発言としては非常に不自然である。他方、これ以外の telisch な状態受動は、構造上は (66) のように worden 文を許容するが、それが意図するところは概ね「事態の経過を観察していた第三者がその完了を報告する」というもので、行為の参加者が直接 (66) を発話する状況は考え難いという³³⁾。つまり、動作受動完了形は発話時に限りなく近い事態の完了まではカバーするものの、行為の完了時に当事者本人によりなされるいわば「完了宣言」までは表現できないのである。恐らくは事態の完了を表す手段として、過去もしくは発話直前までの領域を担う動作受動完了形と、発話の瞬間そのものを担う状態受動との間に、一定の住み分けができているのであろう。

- (65) a. *Das Interview ist nun/jetzt beendet worden. (取材者の発言として)
 b. *Die Verhandlung ist nun/jetzt geschlossen worden. (裁判官の宣言)

として)

- c. *39 Minuten sind nun/jetzt gespielt worden. (解説者の発言として)
- (66) a. Das Problem ist nun ausdiskutiert worden.
b. Alle Gerichte sind nun aufgegessen worden.

このような事実からすれば、ドイツ語の状態受動は少なくとも主文に関する限り、Telizität という意味特徴をもってしても、なお動作受動完了形と競合する段階には至っていないと考えられる。前述の (57) と同様、いかに語彙的に telisch な動詞であっても sein+ 過去分詞の形で行為の頻度や過去の一時点に言及することはできない (→例文 (67))。2 節でみたノルウェー語の状況 (→ (68) に再掲) と比較した場合、その相違は明らかである。

- (67) a. *Das Problem ist schon dreimal/vor 2 Stunden ausdiskutiert.
b. *Der Strauß ist schon dreimal/vor 5 Jahren ausgefochten.
- (68) Byen er tre ganger erobret av romerne. (=25c)
(die stadt ist dreimal erobert von den römern)

次に副文をみる。動作受動完了形との競合が疑われる第三のタイプは、(69) から (71) に挙げる特殊な副文中の状態受動である。状態受動はこうした環境で通常ならば受けるはずの制約から解放され、その文法性はむしろ動作受動の形成に関与する条件下で決定されるようになる。

- (69) a. *Die Feinde sind gesehen. (Rapp 1997: 168)
b. Die Feinde werden gesehen/sind gesehen worden.
c. Sobald die Feinde gesehen waren, gab er Nachricht. (ebd.)
- (70) a. *Die Katze ist gestreichelt. (ebd.)
b. Die Katze wird gestreichelt/ist gestreichelt worden.

- c. Nachdem die Katze gestreichelt war, ... (ebd.)
- (71) a. *Das Mädchen ist geküsst. (ebd.)
- b. Das Mädchen wird geküsst/ist geküsst worden.
- c. Sobald das Mädchen geküsst war, fuhr er fort. (ebd.)

まず、上例 a./b. 文の対立にみられるように、主文で状態受動を形成し難いとされる動詞は nachdem/sobald/sowie といった従属接続詞に導かれる副文中に埋め込まれると³⁴⁾、一転してそれを許容するようになる (→例文 (c))。また、動作受動では頻繁に現れるが状態受動では抑制されることの多い項もこうした副文中には生起可能である。以下 (72) の動作主 (=von ihr), および (73) の具格 (=mit der Löffel) を参照されたい³⁵⁾。

- (72) a. *Der Brief ist von ihr zerrissen. (Rapp 1997: 168)
- b. Der Brief wird von ihr zerrissen/ist von ihr zerrissen worden.
- c. Sobald der Brief von ihr zerrissen war, ... (ebd.)
- (73) a. *Die Suppe ist mit dem Löffel gegessen. (Rapp 1997: 169)
- b. Die Suppe wird mit dem Löffel gegessen/ist mit dem Löffel gegessen worden.
- c. Sobald die Suppe mit dem Löffel gegessen war, ... (ebd.)

さらに、(72c) (73c) は状態受動と動作受動完了形だけに共通する特定の意味特徴を示す。以下の二例は同じ内容を状態受動過去形・動作受動過去形・動作受動過去完了形で比較したものであるが、(74) の場合、手紙が最後まで破られたことを含意するのは a./c. 文のみで、b. 文ではそれが必ずしも前提とされない。また、このとき手紙が破棄された後に彼が去るのは a./c. とともにその直後である。同様に、(75) のスープは a./c. 文では完全に食べ終わられているが、b. 文ではまだ食事の人がいてもよく、かつ、a./c. で主菜が運ばれてくるタイミングに差はない。とすれば、ここで状態

受動と動作受動完了形はほぼ同一の事態を表していることになる。

- (74) a. Sobald/Sowie der Brief von ihr zerrissen war, ging er fort.
 b. Sobald/Sowie der Brief von ihr zerrissen wurde, ging er fort.
 c. Sobald/Sowie der Brief von ihr zerrissen worden war, ging er fort.
- (75) a. Sobald/Sowie die Suppe mit dem Löffel gegessen war, kam das Hauptgericht.
 b. Sobald/Sowie die Suppe mit dem Löffel gegessen wurde, kam das Hauptgericht.
 c. Sobald/Sowie die Suppe mit dem Löffel gegessen worden war, kam das Hauptgericht.

加えて Rapp (1997) によれば、類似の平行関係が次のような文の解釈にも観察される。前節の (36) から (43) で述べた通り、ここに挙げた sein 文はすべて状態再帰構文と状態受動との間で二義的な読みを持つ。例えば kämmen であれば、髪をとかしたのが自分か他人かという問題である。ここでまず主文の動作受動 (76a) と bekommen 受動 (76b) は非再帰的な解釈しか許容しない。これらの文には常に主語以外の動作主が含意されているのである。他方、sein 文 (76c) の読みは、(40) と同様、特定の文脈が存在しない限り曖昧である。結果、子供の髪をとかしたのは本人であっても第三者であってもよい。ところが、同じ状態受動が副文中に生じた場合、可能な読みはもっぱら非再帰的なものに限定される。つまり (77) では、(76c) のような主文とは異なり、動作受動の形成原理が働いているというのである。

- (76) a. Das Kind wurde sorgfältig gekämmt. → nichtreflexiv (Rapp 1997: 197)
 b. Das Kind kriegte die Haare sorgfältig gekämmt. → nichtreflexiv (ebd.)
 c. Das Kind war sorgfältig gekämmt. → reflexiv oder nichtreflexiv (ebd.)

- (77) a. Wir gehen, sobald das Kind gekämmt ist. → nichtreflexiv (Rapp 1997: 169)
 b. Sowie er gewaschen war, verließen sie das Haus. → nichtreflexiv (ebd.)
 c. Nachdem er geduscht war, kam ein Anruf. → nichtreflexiv (ebd.)

このようなデータをふまえ、Rapp (1997: 169) は *nachdem/sobald/sowie* 節に現れる状態受動に限って例外的に *worden* の省略を想定することができる、と述べている。しかし、副文中の状態受動の振舞いをさらに詳しく検証すると、この主張は必ずしも正しくないことが明らかになる。第一に、上例 (77) の文法判断はきわめて疑わしい。本稿の調査によれば、(77) はすべて二義的で、a.~c. のどれについても文中の主語自身が行為の担い手となる読みが可能である。これが事実であれば、状態再帰構文と状態受動の境界設定に関して主文と副文の間に解釈上の相違は存在しないことになる。第二に、主文中で状態受動を形成しない動詞のうちのいくつかは、(69) から (71) の場合と異なり、たとえ *sobald/sowie* に始まる副文中に埋め込まれても文法性が一向に上昇しない³⁶⁾ (→例文 (78))。言われている原理がすべての動詞に当てはまる訳ではないのである。第三に、頻度副詞や過去の一時点を表す副詞を副文中に生起させてその可否を動作受動と状態受動とで比較すると、得られる結果は (79) および (80) のようなものとなる。それぞれの a./b. 文の対立が示す通り、この種の副詞類を伴う状態受動は、前述の (57) や (67) と同様、当該の副文中でもまったく許容されない。第四に、動作主が抑制されることが多い状態受動では、通常、その帰結として *um+zu* 不定詞句の接続が困難であるとされるが (→例文 (81a) (82a))、この制約は *nachdem/sobald/sowie* の副文中でも同じように適用される (→例文 (81b) (82b))。第五に、(83) の結果形容詞、また (84) の様態の副詞の生起をみても、主文と副文の文法性に有意な差は認められない。主文で非文であるものは副文中でもやはり非文である。こうした例をみる限り、主文中で状態受動に課される制約は大部分が副文中にもそのま

ま受け継がれていると考えられる。この意味で状態受動は、たとえ副文中に現れたとしても、動作受動完了形とは相容れない構文である。

- (78) a. Du wirst von unserem Großvater geduzt/gegrüßt.
b. *Du bist von unserem Großvater geduzt/gegrüßt.
c. Du gehörst zu unserer Familie, sobald/sowie du von unserem Großvater geduzt/gegrüßt wirst.
d. *Du gehörst zu unserer Familie, sobald/sowie du von unserem Großvater geduzt/gegrüßt bist.
- (79) a. *Wir gehen, sobald/sowie die Tür noch zweimal geschlossen ist.
b. Wir gehen, sobald/sowie die Tür noch zweimal geschlossen worden ist.
- (80) a. *Nachdem die Tür vor 3 Minuten geschlossen war, kam ein Anruf.
b. Nachdem die Tür vor 3 Minuten geschlossen worden war, kam ein Anruf.
- (81) a. Das Bild wurde/*war von Picasso gemalt, um die Menschen zu schockieren. (Rapp 1997: 196)
b. Nachdem/Sobald/Sowie das Bild von Picasso gemalt wurde/*war, um die Menschen zu schockieren, ...
- (82) a. Die Tür wurde/*war vom Hausmeister geöffnet, um den ganzen Trakt durchzulüften.
b. Nachdem/Sobald/Sowie die Tür vom Hausmeister geöffnet wurde/*war, um den ganzen Trakt durchzulüften, ...
- (83) a. Der Fisch wurde/*war roh serviert. (Rapp 1997: 184)
b. Nachdem/Sobald/Sowie der Fisch roh serviert wurde/*war, ...
- (84) a. Die Nachricht wurde/*war ihm leise mitgeteilt. (Rapp 1997: 202)
b. Nachdem/Sobald/Sowie ihm die Nachricht leise mitgeteilt wurde/*war, ...

4.

ここまで、不可視の結果状態を表すタイプ、強い *Telizität* を伴うタイプ、特殊な副文に現れるタイプについて、状態受動が動作受動完了形と競合可能か否かを検討した。これら三つのタイプはときに直感的に、またときに若干の言語事実から、動作受動完了形に近いという印象を与えるが、詳細を精緻に検証すれば、いずれも予測される混用段階に至っていないことが確認される。不可視の結果状態を表すタイプには動作受動に典型的な副詞類が生起できず、強い *Telizität* を伴うタイプには行為の完了と発話の一体化という条件がある。主文で状態受動に課される制約は大部分が副文にも適用され、結果、*nachdem/sobald/sowie* 節だけを特例として扱う十分な根拠は見当たらない。では、こうした状況をふまえた上でいま一度これまでのデータに立ち戻るとき、Rapp の挙げた (69) から (73) の例、および因由文や条件文に拡張されたそれと同様の文法性はどの位置づけられるべきであろうか³⁷⁾ (→例文 (85) (86))。また、例証として存在する頻度副詞や時の副詞はどう説明したらよいであろうか (→例文 (87a) の *zweimal*, (87b) の *gestern*)。

- (85) a. *Der Satz ist geäußert. (Engelhardt 1969: 175)
 b. Der Satz wird geäußert/ist geäußert worden.
 c. Der Satz kann, da er nun einmal geäußert ist, nicht wieder zurückgenommen werden (ebd.)
- (86) a. *Seine Mitwirkung war von den meisten gewünscht.
 b. Seine Mitwirkung wird von den meisten gewünscht/ist von den meisten gewünscht worden.
 c. Wir sollten ihn, da/wenn seine Mitwirkung von den meisten gewünscht war, von unserem Projekt nicht ausschließen.
- (87) a. Im übrigen gibt der Staatsanwalt selbst zu, daß in der Nähe des Postens

zweimal scharf geschossen ist. (Curme 1964²: 296)

b. Der Brückenkopf von Friedrichstadt ist gestern erstürmt. (ebd.)

規範的にはそうならないはずの状況でこうした混交が散見されるのは、それを可能ならしめるいくつかの要因が複雑に絡み合っているためである。まずその一つは sein 受動の残存である。無標の受動形式であった sein+ 過去分詞が中高ドイツ語後期に本来の役割を終え、結果的に現在の werden 受動に取って代わられたことはすでに述べたが（詳細 1 節）、sein 受動はこのとき完全に駆逐されてしまった訳ではなく、一部はなお特定のイディオムの中にかつての姿を留めている。例えば Sei gegrüßt!, Gott sei gelobt!, Hier sei es bemerkt, dass... といった要求話法、あるいはいわゆる生年月日の表記などである。このような残存形では sein 文が werden 受動とほぼ等価な機能を備え、その働きがときに一般には許容されない構造を可能にする。前節の (78b) や以下 (88a) にみるように、grüßen の状態受動は非文であり、また日付など過去の副詞句も通常は状態受動に生起しない（→例文(89a)）。それにも関わらず(88b) (89b)は適格である。Curme (1964²: 296) はこの問題にさらに踏み込んで、地域的にはとくに北部、テキスト的には戦時中の公文書に古形が多く残るとしているが、果たして上例(87a)の原典は Hamburger Nachrichten (7.1.1914)、(87b)のそれは Official Report of the Great War (4.9.1915) である。ここで任意の状態受動が規範から逸脱する特性を示すとき、それを古形の残存とみるか発展の萌芽とみるかは容易ではない。とりわけ残存の名の下にすべての逸脱を集約せんとすれば、新たな発展の可能性を見失ってしまう危険がある。また、Curme のいう地域的・テキスト的な差異も、現時点ではそれがいかなる一般性を持つか定かではない。ただ、現代語では前節でみた諸制約がなお強く働くことに鑑みれば、sein 受動の残存という、一見、消極的な解法も、予想外の混交を説明する選択肢の一つに数えられて然るべきであろう。

- (88) a. *Du bist begrüßt.
 b. Sei begrüßt!
- (89) a. *Die Tür ist am 30. 11. 1963 geschlossen.
 b. Ich bin am 30. 11. 1963 geboren.

第二の要因は文末の構造である。助動詞文や副文では一連の動詞群が文末に集中するが、定形であれ不定形であれ、過去分詞+worden+sein という形式は単純な過去分詞+sein に比べ複雑で、発話にもより多くの労力を要する。これを回避するため、経済性の観点ならびに文体的理由から、動作受動完了形は状態受動で代替される可能性がある。事実、Curme (a.a.O.) は未来完了形とそれに相当する接続法では、文末がまずぎこちない印象 (clumsiness) を与え、さらにストレスも通常の無標音調を保てないことから (nonconformity of the usual rules for the end-stress)、動作受動が頻繁に状態受動で置換されると述べている³⁸⁾。つまり、複雑な (90b) よりも単純な (90a) が好まれるというのである。この傾向はまた過去形や他の助動詞を用いた副文にも観察され、例えば (91) の文末 geschickt sein mochte は、Curme によれば、geschickt worden sein mochte という非美的な連鎖の代用であるという。

- (90) a. Ich werde/würde gelobt sein.
 b. Ich werde/würde gelobt worden sein.
- (91) Dann erzählte er, daß der junge Mensch seiner Gesundheit sowie seinem Beutel wohl zu viel zugemutet haben und von den Seinen in die Verbannung geschickt sein mochte. (Curme 1964?: 296)

美的価値の是非はさておき、この文末の問題はさきにもた sein 受動の残存とも決して無縁ではない。とくに話法の助動詞が受動態と共起する場合、動作受動が期待される箇所では状態受動が生じるケースがあるが、これ

は sein が werden に駆逐されていく過程でその本来の役割を不定詞領域、それもことに wollen との結合において、長らく保持し続けた結果である(→例文 (92))。

- (92) a. Wenn er im Lager einherging, wollte er nicht begrüßt sein. (Curme 1964²: 296)
- b. Das will getan sein.
- c. Die Bücher wollen gelesen sein.
- d. Selbst kleine Details wollen ausgeklügelt sein. (Terakado 2001: ess30d)
- e. Damit soll nicht gesagt sein, dass man so was nicht tun kann.

もちろん、こうした sein 受動はあくまでも同時制の werden 受動と等価なもので、それが直接、動作受動完了形との競合を示唆する訳ではない。従って、例えば上例 b./c./e. は、文意を変更しないとすれば、単に (93) のような werden 文に書換えられるに過ぎない。また、(92a) にみる語彙的な残存形を除き、この種の文には Das (=92b), Bücher (=92c), Details (=92d) など無意志の事物が主語に立つ傾向がある。つまり、sein と werden は助動詞と共起するからといって常に交換可能とは限らないのである(→例文 (94))。しかし、少なくともここに werden 受動と競合する sein 文が存在することは確実で、さらに (95) に挙げる未来完了を意味する文タイプを合わせて考慮すれば、助動詞との共起という条件を逸脱理解の糸口とすることもあながち無意味ではないと思われる。以下 (95) は、文末の形式の如何に関わらず、各文の間に意味的な差異がほとんど認められない。こうした未来の環境では同時制の sein/werden のみならず、ときに動作受動完了形までもが機能的重複の対象となるのである。

- (93) a. Das will getan werden.
- b. Die Bücher wollen gelesen werden.

- c. Damit soll nicht gesagt werden, dass man so was nicht tun kann.
- (94) a. Er will geküsst werden.
b. * Er will geküsst sein.
- (95) a. Die Bücher müssen bis Ende des Semesters gelesen werden/sein/wor-
den sein.
b. Das Problem muss bis zur nächsten Sitzung gelöst werden/sein/wor-
den sein.
c. Die Entscheidung sollte spätestens bis Mitte Oktober getroffen wer-
den/sein/worden sein.

同じ現象は次の副文にも観察される。以下 (96) は Rapp のいう *sobald/sowie* を未来完了が想定される文脈に配し、受動態間で意味の相違を比較したのだが、ここでもそれぞれの読みに有意な差は認められない。これらの副文は動作受動現在形であれ、状態受動現在形であれ、動作受動完了形であれ、どれも未来のある時点で汲み上げ作業が完了することを表している。

- (96) Wir können wieder ins Haus hinein, sobald/sowie die Wassermengen
abgepumpt werden/sind/worden sind.

さらに、この解釈のありかたは *bis* や *wenn* に導かれる副文でも変わらない (→例文 (97))。

- (97) a. Es dauert noch einige Tage, bis die Wassermengen abgepumpt werden/
sind/worden sind.
b. Wir können wieder ins Haus hinein, wenn die Wassermengen abge-
pumpt werden/sind/worden sind.

一般的な時制論としてドイツ語の現在形は未来領域を指示することができ、未来完了形は往々にして現在完了形で代用される傾向にあるが、(96)や(97)の事実が示唆しているのは、そうした特性に基づく機能的重複が助動詞文のみならず一定の副文でも起こり得ること、またそれが未来時における事態の完了という広範な意味特徴に統御されていることである。このような解釈の一致は werden/sein が定動詞となり、現在や過去における完了を表す主文では望みようがない（→例文(98)）。

- (98) a. Die Wassermengen werden/sind abgepumpt (worden).
 b. Die Wassermengen wurden/waren abgepumpt (worden).

ただし、ここには過去分詞となる動詞が自発的な再帰用法を持たないという付帯条件が必要である。

- (99) a. Die Tür muss bis 18 Uhr geschlossen sein.
 b. Wir gehen, sobald/sowie/wenn die Tür geschlossen ist.
 c. Wir müssen warten, bis die Tür geschlossen ist.

上例(99)の状態受動はすべて二義的である。一つは(100)のような動作受動タイプ、つまり誰かがドアを閉めるという読みで、もう一つは(101)のような自発態、すなわちドアが自然に閉まるという読みである。

- (100) a. Die Tür muss bis 18 Uhr von jemand geschlossen werden/worden sein.
 b. Wir gehen, sobald/sowie/wenn die Tür von jemand geschlossen wird/worden ist.
 c. Wir müssen warten, bis die Tür von jemand geschlossen wird/worden ist.
 (101) a. Die Tür muss sich bis 18 Uhr schließen.

- b. Wir gehen, sobald/sowie/wenn sich die Tür schließt.
- c. Wir müssen warten, bis sich die Tür schließt.

動作主が状態受動に生起し難いことはすでに述べたが(→例文(72)(81)(82), および注35)), ここにみる曖昧性は状態受動のこの構文特性に加え、過去分詞となる動詞が自発的な再帰用法を持つことに起因している。ドアは人間力を伴わず、風などにより自然に閉まることがあるが、(101)の解釈はそうした状況で成立するものである。さらに、自発的な読みの有無には、動詞のみならず主語に立つ名詞の性質が少なからず関与している。例えば öffnen の場合、ドアや窓は自然に開くが、銀行口座はひとりでに開設されない。また、砂糖や霧は自然に auflösen するが、方程式を解くためには動作主が必要である。このことから(95)から(97)でみた受動形式の機能的重複は、(a) 助動詞文ないしは副文で、(b) 未来における事態の完了が想定される文脈が整い、かつ、(c) 過去分詞に自発的な読みがないときに限って可能だということになる³⁹⁾。

以上、本稿では現代ドイツ語の状態受動が動作受動完了形との競合に関してどのような発展段階にあるかを検証したが、その主たる論旨は(102)のようにまとめられる。

- (102)
- a. 歴史的な成立時期および現代語にみられる諸制約からして、状態受動と動作受動完了形は本質的に異なる存在である(→2節, 例文(15)から(22)参照)。
 - b. 不可視の結果状態を表す状態受動, 強い Telizität を伴う状態受動, sobald/sowie/nachdem に導かれる副文中に現れる状態受動は, 一見, 動作受動完了形に近いという印象を与えるが, それらでさえ完全な混用段階には至っていない(→3.2節参照)。

- c. この意味で Tieroff のいう段階 5 への移行は、少なくともドイツ語では、まだその緒に就いていないと考えられる（→ 2 節、表 (24) 参照）。
- d. ただし、状態受動と動作受動、さらに場合により動作受動完了形までもが、ある種の機能的重複を示すことがある。これは sein 受動の残存、文末の文体的特徴、助動詞との共起、副文内での生起など、いくつかの要因が複雑に交錯した例外的産物とみられる（→ 4 節参照）。

残された問題はドイツ語と他言語の関係である。Tieroff の予測によればゲルマン語の中ではデンマーク語がドイツ語と同じ段階 4 に属しているが、仮にこの予測が正しいとした場合、デンマーク語の状態受動のありかたを検証し、同一パラダイムに二言語がどう共存するかを問うことは、システム全体の解明につながるのみならず、ドイツ語という単一言語をより深く知るためにも有意義である。若干のデータを見てみよう。

- (103) a. Døren bliver lukket. 動作受動 (Die Tür wird geschlossen.)
- b. Døren blev lukket.
- c. Døren vil/skal blive lukket.
- d. Døren er blevet lukket.
- e. Døren var blevet lukket.
- f. Døren vil/skal være blevet lukket.
- (104) a. Døren er lukket. 状態受動 (Die Tür ist geschlossen.)
- b. Døren var lukket.
- c. Døren vil/skal være lukket.
- d. Døren har været lukket.
- e. Døren havde været lukket.
- f. Døren vil/skal have været lukket.

いわゆる s-Passiv や fä-Passiv を除き⁴⁰⁾、デンマーク語では blive (werden) + 過去分詞が動作受動, være (sein) + 過去分詞が状態受動を表現する。時制体系は、用法の詳細や使用頻度を捨象すれば、基本的にドイツ語と同じ6時制である(→例文(103)(104))。しかし、完了形の助動詞選択はドイツ語の werden/sein がともに sein 支配であるのに対して、デンマーク語では blive が være 支配, være が have 支配である。結果、ドイツ語の worden 文に相当する være+blevet+ 過去分詞と、ドイツ語にはみられない have+været+ 過去分詞が形式的に区別されることになる。そして、例えば以下(105)の場合、発話時から切り離された過去の行為を述べる a. 文は、ドアのペンキがすでに剥げ落ちていることを含意し、行為の結果が発話時にまで及ぶことを示す b. 文は、ペンキを塗られてきれいになったドアの状態を描写しているとされる⁴¹⁾。仮にこれが事実であれば、blevet 文は少なくとも行為の影響がどこまで残るかに関してドイツ語とは異なる前提に立つことになる。例文(18b)でみた通り(→(106)として再掲)、worden 文ではいったん達成された結果を後に変更することが可能であり、行為の影響が必ずしも発話時にまで及ぶとは限らない。

(105) a. Døren har været malet. (岡田 / 菅原 / 間瀬 1984: 114)

(Tür-DET hat gewesen gemalt)

b. Døren er blevet malet. (ebd.)

(Tür-DET ist geworden gemalt)

(106) Die Tür ist geschlossen worden, aber Hans hat sie wieder geöffnet. (10b)

これに関連して甲斐崎(2000)はドイツ語の状態受動完了形をデンマーク語の have+været+ 過去分詞と対比させ、前者が発話時にはすでに終了している事態を表すのに対して、後者は不定過去、つまり結果状態がある期間だけ存在していたことを述べる用法と、継続的な意味、すなわち結果状態が発話時まで保持されていることを述べる用法とを合わせ持つ

としている。以下、ドイツ語の状態受動完了形は断線していた電話線がすでに復旧した状態で発話されているが（→例文（107））、デンマーク語の have+været+ 過去分詞の場合、絶版となっていた選集が再版された文脈（108a）と、デンマークが王国である状態が現在まで変わらず継続している文脈（108b）とが可能だというのである。

(107) Vielleicht ist es die Tochter, die anruft, wahrscheinlich hat sie es schon vor Tagen versucht, als die Leitung unterbrochen gewesen ist, und jetzt versucht sie es immer wieder.

(甲斐崎 2000: 30)

(108) a. Det her foreliggende udvalg består af fortællinger og skitser som ikke tidligere har været obtrykt... (甲斐崎 2000: 32 一部抜粋)
(die hier vorliegende Auswahl besteht aus Erzählungen und Skizzen die nicht früher hat gewesen abgedruckt...)

b. ... for lige fra gamle dage har Danmark været styret af konger ... (甲斐崎 2000: 33 一部抜粋)

(... denn gerade seit alten Tagen hat Dänemark gewesen beherrscht von Königen)

これは blevet 文の性質をみるためだけでなく、受動体系における være の位置を確認するためにも貴重な指摘であるが、こうした差異は単に受動形式に依存した現象とするのではなく、それを時制体系における完了形のありかたの違いと捉えることでより興味深い観察対象となる。任意の状態が発話時まで続くことを表現する場合、単純時制を好むドイツ語が複合時制を用いる英語と異なることはよく知られているが、デンマーク語の完了形はこの点でむしろ英語に近く、例えば以下（109）のような状況を表す際にも、当該の状態がなお継続中であれば現在完了の使用が義務的であるとされる⁴²⁾。状態受動と動作受動完了形の競合を考える場合、後続状態の

把握はとりわけ大きな問題であるが、それを表現するためにドイツ語とデンマーク語は別の時制を用いるのである。Ehrich/Vater (1989: 112) によれば、デンマークのドイツ語学習者にはときに (111b) のような誤りがみられるというが、この干渉も恐らくは時制体系の相違に帰せられるべきものであろう。

- (109) Ich warte auf dich seit vielen Stunden.
 (110) Jeg har ventet på dig i mange timer. (Ehrich/Vater 1989: 114)
 (ich habe gewartet auf dich seit vielen Stunden)
 (111) a. Ich bin aufgeregt/verärgert.
 b. ??Ich bin aufgeregt/verärgert worden.

Blive が果たす役割は何か。そこに være はどう関わるのか。動作受動完了形は worden 文と blevet 文ではどう異なるのか。また、ドイツ語には存在しない have+været+ 過去分詞が blevet 文に対して持つ機能は何か。そして完了形とはいかなる時制なのか。こうした問題を言語ごとに整理し、少しずつ解決していくことが本稿に与えられたさらなる課題である。

<Anmerkungen>

- 1) 状態受動を用語上どう表現するかはそれぞれの研究者により異なる。例えば Adomoni, Helbig, Helbig/Buscha, Helbig/Kempter などは Zustandspassiv (vs. Vorgangspassiv) を用い、Brinker, Duden, Schoenthal, Zifonun らはほぼ一貫して sein-Passiv と werden-Passiv を対置させている。また、Eroms や Valentin など通時的な側面を扱う論文は、その性質上、後者を採用することが多いようである。用語の詳細についてはさらに Hermanns (1987) を参照。
- 2) Frajzyngier (1978: 138)
 ただし、ある言語において受動の二つの意味 (例えば、動作受動と状態受動) が異なる形式で表現されるからといって、そのうちの一つが必ず BE を含んでいるとは限らず、逆にある言語に受動形式が一つしか存在しない場合、その形式は状態特性に関して曖昧であるという。

- 3) bleiben 受動に関しては以下にいくつかの現象を指摘するにとどめる。このうち (a)(b) については Helbig (1968: 145, 1987: 223f.), Helbig/Buscha (1986: 182), Helbig/Kempton (1997:46f.), Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1850) など、(c)(d) については Helbig (1987:224f., 1989: 217f.), Helbig/Kempton (a.a.O.) などを参照。また、bleiben が自動詞で受動態を形成するか否かという問題は、Höhle (1978: 40) のようにそれを不可とする見解 (solange hier gearbeitet wurde/*blieb) と、Askedal (1987: 23) のようにほとんど例がないが原則的には可能とする見解 (Für sein Wohlbefinden blieb von der Familie gesorgt.) とに分かれる。

(a) 持続する結果状態を表す際に sein と bleiben は交換可能なことがある。

Die Tür ist/bleibt geöffnet.

(b) また、意味的に bleiben と共起しない動詞は状態受動をも形成しない。

Die Frau *ist/*bleibt bewundert.

(c) しかし、状態受動が可能なすべての動詞で同様に bleiben 受動ができる訳ではない。これは bleiben 受動には「過去分詞が可逆的な意味を持たなければならない」という制約が働くためである。

Der Kuchen ist/*bleibt gebacken.

Der Brief ist/*bleibt geschrieben.

(d) さらに、werden-sein-bleiben というスケールには auxiliar-kopulativ というスケールが対応する。否定のありかたもこれに従い、助動詞性が高いものほど nicht で、逆にコプラ性が高いものほど un で否定される傾向がある (以下、アスタリスクがカッコ内に表示されているのは「ほとんど用いられない」の意)。

Das Fenster wird/ist/(*)bleibt nicht geöffnet.

Das Fenster *wird/(*)ist/bleibt ungeöffnet.

- 4) Brinker (1971: 107/1990: 117)
 5) Eroms (1992: 238)
 6) Frajzyngier (1978: 140f.)
 7) Eroms (1992: 232ff.)
 8) Eroms (1992: 230)
 9) Valentin (1987: 11f.)
 10) Eroms (1992: 238)

また Curme (1964:296) によれば、受動態形成の助動詞としての sein は確かに werden に取って代わられたものの、要求話法領域においてはその役割を最後まで保持しつづけたのだという。

- 11) ただし、与格支配の動詞がすべてそうなるわけではない。与格支配の動詞の中には状態表現で与格が文中に残り、過去分詞が3人称・単数・中性形になるタイプもある。この場合、当該の文の読みは曖昧である。
- (a) Hlerum var skotið fyrir gluggann. 二義的解釈
(Fensterladen-DET-Dat.pl. sein-3.sg.past. schieben-pp. über Fenster-DET-Akk.sg.)
- 12) Glinz, Hans: Die innere Form des Deutschen. の初版は1952年、本稿で使用したのは1968年の第5版である: Wir haben drei Geschehensarten, nicht nur zwei ... (1968: 381)。また、(13)(14)に挙げたGrimmとWilmannsの見解はBrinker (1971: 70)からの引用である。
- 13) Wilmanns (1906: 141)
- 14) Grimm (1898: 16)
- 15) Valentin (1987: 12)
- これに対してDal (1966: 129)は、以下に挙げるParzivalへの出現が最古のものであるとしている。ただし、その後のwordenの浸透速度は非常に遅く、ルター聖書にも例証はほとんどみられないという(Dal: a.a.O.)。Curme (1964: 296)にもwordenの出現は13世紀であり初期段階の例証は極めて稀であることが記されているが、同ヶ所ではさらにこの完了形式が16世紀末にとくに南部で確立されたと述べられている。
- (a)..., daz Gahmuret gepriset vil was worden. (Parzival 57, 29)
- 16) この制約は動作受動の完了形に対して課されるものである。動作受動であっても完了形でなく、かつ継続的なアスペクトを持つ動詞であれば、この限りではない。
- (a) Das Gebäude wird seit 3 Tagen renoviert. [+durativ]
(b) *Die Tür wird seit 3 Tagen geschlossen. [-durativ]
- 17) 例文(19)のようなsein+過去分詞を状態受動とみるかどうかについては議論の余地がある。例えばHelbigは、この種の文を一貫して状態受動と区別して、一般的な状態表現(allgemeine Zustandsform)と呼んでいる。詳細はHelbig (1982: 98ff., 1983b: 52f., 1989: 217), Helbig/Buscha (1986: 179ff.), Helbig/Kempton (1997: 36ff.), Thieroff (1994: 34)などを参照。
- 18) 二重完了はDoppelperfekt, Doppelumschreibung, Vor-Vorvergangenheitなどと呼ばれ、具体的には次例(a)(b)のような文をいう。詳細はLitvinov/Radčenko (1998),あるいはEroms (1984)を参照。
- (a) Ich habe die Sache längst vergessen gehabt.
(b) Er ist schon fast gestorben gewesen.
- 一般にこの種の文はかなり有標な構造と考えられているが、能動態に限

れば、例証は歴史的にも少なからず存在する（以下は Litvinov/Radčenko (1998: 9f.) より引用）。

(c) ...ich hätte sie gern gestraft gehabt...(Goethe)

(d) ...hättest du es nicht so sehr verloren gehabt...(Hölderlin)

(e) ...Wohin ist denn Deine Familie verreist gewesen...(Engels)

しかし、受動態の二重完了はきわめて稀である。Litvinov/Radčenko (1998) では文学作品から収集した 426 例に加え、Hörbelege としてさらに 50 例が取り上げられているが、その中に受動態の二重完了は一例も存在しない。また Höhle (1978: 43) によれば、例文 (22) のような構造は「とくに南ドイツ方言で、過剰に都会的な意識の表れ (Hyperurbanismus) として発話されることがあるかも知れない」という。ただし、Thieroff (1992: 17) は werden 受動ならば直説法でも接続法でもそれが可能であるとしている (ist/war/sei/wäre gesungen worden gewesen vs. *ist/war/sei/wäre gesungen gewesen)。

19) 以下の議論はおもに Thieroff (1994) による。

20) telisch/atelisch をめぐる用語の使用はかなり錯綜している。本来、telisch とは「ある目的の遂行を表現する」という意味であるが、目的の遂行はときに事態の完了を意図し、さらに何らかの結果を生じることも少なくない。このため telisch の類義語としては perfektiv や resultativ をはじめ、inhomogen, grenzbezogen, nonadditiv, nondurativ, terminativ, zyklisch など様々な用語が用いられている。本稿ではこうした用語使用の是非には立ち入らず、一定の状態変化を含意するものをおおまかに telisch、それ以外を atelisch と考える。またそこから生じる予想外の誤解を避けるため、以下の議論では telisch/atelisch に対して特定の訳語を充てず、それを原語のまま表示していくこととする。なお、こうした用語の詳細に関しては C.R.L.G. (1987: 236), Musan (1999: 189f.), Thieroff (1992: 25f.) などを参照。

21) Thieroff (1994: 52) によれば、Byen er erobret. が Byen er blitt erobret. を駆逐しつつあることは多くのインフォーマントが認めるところであるが、ノルウェー語にはそもそも blitt が始めから存在しない方言もあるという。

22) 再帰代名詞のうち、以下 (a) のように再帰動詞との結合においてのみ用いられるタイプを echtes Reflexiv, (b) のように他動詞目的語のパラダイムの一部として用いられるタイプを unechtes Reflexiv という。これらは場合によって reflexive Verben im engeren Sinne vs. reflexive Konstruktionen,あるいは formal-reflexiv vs. semantisch-reflexiv などと表記されることがあるが、こうした用語の詳細に関しては Buscha (1991: 152), Helbig (1987: 218) などを

参照。

(a) Die Mutter erholt/erkältet sich. (*Die Mutter erholt/erkältet das Kind.)

(b) Die Mutter kämmt/wäscht sich. (Die Mutter kämmt/wäscht das Kind.)

- 23) 形容詞化した過去分詞としては他に *angebracht*, *angewiesen*, *bekannt*, *beliebt*, *gebildet*, *gegeben*, *umstritten*, *verhaßt* etc. などが挙げられる。これに関する詳細はとくに Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1821f.), ならびに Milan (1985: 150ff.) を参照。

- 24) これについては独英間でほぼ平行的な現象がみられる。まず以下 (a) に示す通り、接頭辞 *un-* が付加された過去分詞と動作主を表す前置詞句 (*by John*) が共起した例は非文である。また、(b)–(e) のように過去分詞が形容詞の環境に現れた場合も動作主項の生起は許容されない。この詳細は Lenz (1993: 51) を参照。

(a) *The window is being unopened by John.

(b) The window will remain closed (*by John).

(c) The window looks closed (*by John).

(d) Das Fenster bleibt (*von Maja) geschlossen.

(e) Das Fenster sieht (*von Maja) geschlossen aus.

ただし、英語では *be being+* 過去分詞が一義的に動作受動を表すのに対して、単純な *be* 受動ではその読みが曖昧である。従って、英語でも *be* 受動であれば *un-* と動作主項は共起可能である。そして、これが (31d)(31e) に相当する構造である。

(f) The plant is untouched by human hands. (Bryan 1995: 19)

(g) All his claims are unsupported by the data. (ebd.)

また接頭辞 *un-* の機能そのものについていえば、例えば **unklein*, **ungrün*, **unverrückt* のように必ずしもそれがすべての形容詞に付加される訳ではない。従って、*un-* がカバーする領域と形容詞全体の領域とは完全には一致しない。

- 25) (35a) は後置された *genug* を含む語群がそのままの語順では *worden* による完了形を形成しにくいことを述べたものである。'genug belastet' という逆の語順の場合はこの限りではない。

(a) Die Schüler sind schon genug belastet.

(b) Die Schüler sind schon genug belastet worden/*geworden/gewesen.

また (35c) のような比較変化を伴う文は、オーストリア (Oberösterreich, Niederösterreich, Salzburg etc.) の口語では *worden* を用いた完了形が可能である。

(c) Das Mädchen ist schöner/größer/klüger worden.

オーストリアのドイツ語には全体的に nonchalant な傾向があるとされるが (Grzega 2000: 60), この現象が geworden とすべきところで単に ge- を省略してしまうという言語使用に唯一的に起因するか否かは不明である。過去分詞の ge- から弱母音 -e- が欠落し, それに g- や k- の形で実現される例はよくみられるが, gehen や kommen など軟口蓋閉鎖音で始まる動詞の場合, とくに発音上の理由から, このプロセスがさらに進行して ge- 全体の省略に至ることがある (gegangen → g'gangen → gangen/gekommen → g'kommen → komma)。

しかし, werden → worden はこれに当てはまらない。

- 26) 状態再帰構文に関する議論の詳細は Buscha (1991), Duden 4 (1995: 183), Helbig (1987: 218f., 1989: 217), Helbig/Buscha (1986^o: 178, 220f.), Helbig/Kempton (1997: 35f.), Milan (1985: 154ff.), Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1818f.) などを, また sein 支配の完了形と状態受動の関係については Helbig (1968: 142), Höhle (1978: 43), Koo (1997: 101), Milan (1985: 158ff.) などを参照。
- 27) さらに再帰動詞と状態再帰構文との関係については, Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1819) において, とくに感情を表す動詞群で単一語と複合語が相補分布を成すことが指摘されている。
- (a) Ich ärgere mich./Ich bin verärgert.
 (b) Ich freue mich./Ich bin erfreut.
 (c) Ich wundere mich./Ich bin verwundert.
- 28) Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1809) によれば, (48) は例えば Die Blume ist vor Stunden aufgeblüht. などと対立を成して結果状態を表していると考えられる。実際, 同じ sein 支配の自動詞でも ankommen や sterben のような瞬間的な状態変化を意味するものでは, その完了形に継続的な意味を表す副詞を共起させることができない。
- (a) *Er ist seit Stunden in Frankfurt angekommen.
 (b) *Mein Vater ist seit Stunden gestorben.
- しかし (48) は, 正確には花が徐々に咲きつつあるという非常にゆっくりした事態の進行を描写しているのかもしれない。
- 29) Helbig/Buscha (1986^o: 181f.)
- 30) Helbig/Buscha (1986^o: 181) は完了相の他動詞ではあるが, 目的語に及ぶ影響が弱く, 新たな状態が創出されるとは言い難い動詞の場合, 状態受動の形成は不可であると述べ, その例として次の動詞を挙げている :befragen,

beglückwünschen, bieten, feststellen, loben, necken, senden, streicheln, zeigen. また, Helbig/Kemptoner は次の例により streicheln からの状態受動を非文としている。

(a) *Ihre Hand war gestreichelt. (Helbig/Kemptoner 1997: 41)

31) 次の議論で述べることだが, Die Katze ist gestreichelt. や Ein idealer Kandidat ist gefunden. にはこの他に強い Telizität を表す読みが存在する。この場合, 相当する日本語は例えば「その猫はたったいままでられたところです」, ならびに「理想的な候補者がちょうど見つかりました」などである。

32) 自動詞による状態受動は非常に制限されており, 例えば Schoenthal (1976) のように受動態をかなり包括的に扱う文献の中でも言及されずに留まることが少なくない。しかし, 以下の例が示すようにまったく不可能という訳ではない。

(a) Dem Freund ist damit geholfen. (Helbig/Buscha 1986⁹: 181)

(b) Nach diesem Plan ist nicht daran gedacht, große Mittel aufzuwenden. (Höhle 1978: 41)

詳細は Brinker (1971: 81f.), Helbig/Buscha (1986⁹: 181), Höhle (1978: 41f.), Koo (1997: 104f.), Leirbukt (1983) などを参照。

33) インフォーマントテストによる。

34) 例文 (70) では streicheln による状態受動が非文として扱われているが, ここでの趣旨は, sehen/streicheln/küssen のように通常は状態受動を形成し難い動詞でも当該の副文中ではそれが可能になるということである。ただし, (54) や (55) で述べた不可視の結果状態を表す読みがあれば, Die Katze ist schon gestreichelt. や Das Mädchen ist schon geküsst. などもあり得ない訳ではない。

35) 状態受動に生起する動作主の詳細に関しては Brinker (1990: 118ff.), C.R.L.G (1987b), Helbig (1983b: 49), Helbig/Buscha (1986⁹: 182f.), Vaagland (1983) を参照。例えば von-PP は状態受動には生起し難いとされているが, Vaagland の調査によれば, 収集した 3181 例のうち形式的にはあれ von-PP を含むものが 202 例は認められた (=6,35%)。さらに, そこから (a) のようなイデオムと (b) のような nicht-ageniv なタイプを除いても, 純粋に動作主を表していると考えられるものが 65 例 (=2,04%) は残るといふ。

(a) Eine Sonderunterstützung erhalten Personen, die von einer Betriebsstilllegung ... betroffen sind. (Vaagland 1983: 196)

(b) Vorn und hinten war der Hof von einer Ziegelsteinmauer abgeschlossen. (ebd.)

この動作主を表す von-PP のうち, Vaagland は以下 (c) のような例を, そこ

に表現されている事態が継続的な状態 (durative Zustände) ではなく点的な行為 (punktuelle Handlungen) であるという理由から、動作受動完了形からの worden の省略であるとみなしている。

- (c) Am 10. Januar 1920 trat das Friedensdiktat ... der Vertrag von Versailles endgültig in Kraft, nachdem er am 22. Juni 1919 von der deutschen Nationalversammlung unter schärfstem Protest angenommen ... war. (Vaagland 1983: 197)

これは Rapp の考えによれば、当該の状態受動が nachdem に導かれる副文中に埋め込まれているためとなろう。とくに本文中の例文 (70c) を参照。

- 36) Litvinov/Nedjalkov (1988) は duzen の状態受動に関して以下 (a) の文を挙げ、「即座に、あつという間に」などのニュアンスが読み込める際には適切な文が形成されるとしている。しかし、実際にインフォーマントテストすると duzen/grüßen などの状態受動はほとんど許容されない (→例文 (b))。

(a) Sofort ist er geduzt. (Litvinov/Nedjalkov 1988: 144)

(b) *In der Kneipe war er sofort/im Nu geduzt/gegrüßt.

- 37) (85) は関連文献での引用がきわめて多い有名な例文である。原典は次の通り: Die Grenze zwischen Möglichem und Nicht-Möglichem ist, wie ich aus den Informationen meiner Gewährleute entnehme, nicht immer klar festzulegen. „Die Stadt ist zerstört“ wurde von allen akzeptiert, bei „der Satz ist geäußert“, zögert man. Sobald diese Aussage aber in einen bestimmten Kontext eingebaut wird, kann auch sie ins Zustandspassiv gesetzt werden: „Der Satz kann, da er nun einmal geäußert ist, nicht wieder zurückgenommen werden.“ ... Daraus kann man schließen, daß den 2. Partizipien der transitiven Verben die Möglichkeit offen steht, eine Verbindung mit „sein“ einzugehen, daß aber nicht alle Verben von ihr Gebrauch machen können... (Engelhardt 1969: 175f.)

- 38) (90a) の状態受動に対して Curme が想定する標準的な音調は以下 (a) の通りである。各語の右に付した数字が番号順にストレスの強さを示している (1 が第一強勢)。

(a) Ich werde/würde gelobt(1) sein(2).

これに対して有標とされる (90b) の音調は次の通りである。

(b) Ich werde/würde gelobt(1) worden(3) sein(2).

- 39) 本文で挙げた schließen, öffnen, auflösen 以外に自発態を形成すると考えられる動詞には例えば次のようなものがある: ausdehnen, bräunen, brechen, biegen, erhöhen, erwärmen, färben, kräuseln, schälen, verkleinern, vergrößern, verstärken usw.

40) 3 人称の再帰代名詞が -s の形に縮約されて動詞の一部を構成するものを s-Passiv という。いわゆる中間態のことである。この形式は発生的には再帰や相互を意味するものであったが、現在では受動がその中心的機能となっている。また少数の例外を除き、(助動詞と結合する)不定詞、もしくは現在形か過去形でしか用いられない。実際の言語使用では説明書、処方箋、新聞の見出しなどに多くみられるとされる。詳細は岡田 / 菅原 / 間瀬 (1984: 114), Fredsted (2002^s: 148f.) を参照。

(a) Ure repareres billigt.

(Uhren reparieren-sich billig)

(b) Fisk kan enten koges eller steges.

(Fische können entweder kochen-sich oder braten-sich)

他方、fä-Passiv はドイツ語の bekommen 受動に相当するもので、構文的にも fä+ 目的語 + 過去分詞という形式を持つ。詳細は岡田 / 菅原 / 間瀬 (1984: 113), Fredsted (2002^s: 149) を参照。

(c) De fik bilen repareret.

(sie bekamen das Auto repariert)

(d) Han fik sin mad serveret.

(er bekam sein Essen serviert)

41) 岡田 / 菅原 / 間瀬 (1984: 114)

42) Ehrich/Vater (1989: 110): Die Verwendung des Perfekts ist im Dänischen eher strenger geregelt als im Deutschen und entspricht ungefähr dem Perfektgebrauch im Englischen. „Strenger geregelt“ ist so aufzufassen, daß immer dann, wenn ausgedrückt werden soll, daß der Folgezustand e' eines Vorgangs e mit dem Sprechereignis überlappt, das Perfekt obligatorisch ist.

<Literatur>

Abraham, Werner/Theo Janssen (Hrsg.) (1989): Tempus-Aspekt-Modus. Niemeyer. Tübingen.

Adomoni, Wladimir (1970^s): Der deutsche Sprachbau. Beck. München.

Andersson, Sven-Gunnar (1972): Aktionalität im Deutschen. Skriv Service AB. Uppsala.

Askedal, John O. (1984): Zum Stellenwert der Fügungen *werden/sein/bleiben* + Partizip II im deutschen Passivsystem. In: Voprosy obscego i sopostavitel' nogo jazykoznanija. Linguistica 17. 9-34

Askedal, John O. (1987): Syntaktische Symmetrie und Asymmetrie im Bereich der

- passivischen Fügungen des Deutschen. In: C.R.L.G. (Hrsg.): Das Passiv im Deutschen. 17–49
- Askedal, John O./Christen Christensen/Ådne Findreng/Oddleif Leirbukt (Hrsg.) (1983): Festschrift für Laurits Saltveit. Universitetsforlaget. Oslo-Bergen-Tromsø
- Beedham, Christopher (1987): Das deutsche Passiv: Aspekt, nicht Genus verbi. In: DaF 24. 160–165
- Brandt, Margareta (1982) : Das Zustandspassiv aus kontrastiver Sicht. In: DaF 19. 28–34
- Brinker, Klaus (1971): Das Passiv im heutigen Deutsch. Hueber. München.
- Brinker, Klaus (1990): Aktiv und Passiv in der deutschen Sprache der Gegenwart. In: MS 100. 116–127
- Bryan, Agnes (1995): Der Erwerb des Passivs: sprach- und lernbarkeitstheoretische Betrachtungen zum Englischen und Deutschen. Dissertation. Universität Tübingen.
- Buscha, Joachim (1991): Das Zustandsreflexiv als grammatische Kategorie. In: DaF 28. 149–155
- C.R.L.G. (Centre de Recherche en Linguistique Germanistique, Nice, Hrsg.) (1987a): Das Passiv im Deutschen. Niemeyer. Tübingen.
- C.R.L.G. (Centre de Recherche en Linguistique Germanistique, Nice) (1987b): Transformativität und Intransformativität. Zur Interpretation deutscher Passivsätze. In: C.R.L.G. (Hrsg.): Das Passiv im Deutschen. 235–255
- Curme, George O. (1964²): A grammar of the German language. Frederick Ungar Publishing Co. New York.
- Dal, Ingrid (1966³): Kurze deutsche Syntax. Niemeyer. Tübingen.
- Dittmar, Norbert/Martina Rost-Roth (Hrsg.) (1997³): Deutsch als Zweit- und Fremdsprache. Lang. Frankfurt a/M.
- Duden Bd.4 (1995⁵): Die Grammatik. Hrsg. und bearb. von G. Drosdowski. Dudenverlag. Mannheim.
- Duden Bd.9 (1985³): Richtiges und gutes Deutsch. Bearb. von D. Berger und G. Drosdowski. Dudenverlag. Mannheim.
- Ehrich, Veronika/Heinz Vater (1989): Das Perfekt im Dänischen und Deutschen. In: Abraham, Werner/Theo Janssen (Hrsg.): Tempus-Aspekt-Modus. 103–132
- Engelhardt, Hiltraud (1969): Realisiertes und Nichtrealisiertes im System des deutschen Verbs. Das syntaktische Verhalten des zweiten Partizips. Alfred Kümmerle. Göppingen.

- Eroms, Hans-Werner (1984): Die doppelten Perfekt- und Plusquamperfektformen im Deutschen.
In: Eroms, Hans-Werner/Bernhard Gajek/Herbert Kolb (Hrsg.): *Studia Linguistica et Philologica*. Festschrift für Hans Matzel zum 60. Geburtstag. 343–351
- Eroms, Hans-Werner (1992): Das deutsche Passiv in historischer Sicht. In: Hoffman, Ludger (Hrsg.): *Deutsche Syntax*. 225–249
- Eroms, Hans-Werner/Bernhard Gajek/Herbert Kolb (Hrsg.) (1984): *Studia Linguistica et Philologica*. Festschrift für Hans Matzel zum 60. Geburtstag. Carl Winter. Heidelberg.
- Frajzyngier, Zygmunt (1978): An analysis of be-passives. In: *LIN* 46. 133–156
- Fredsted, Elin (2002⁸): *Langenscheidts Praktisches Lehrbuch Dänisch*. Langenscheidt. Berlin.
- Glinz, Hans (1968⁹): *Die innere Form des Deutschen. Eine neue deutsche Grammatik*. Francke. Bern.
- Grewendorf, Günther (1995): Präsens und Perfekt im Deutschen. In: *ZS* 14/1. 72–90
- Grimm, Jacob (1898): *Deutsche Grammatik*. Teil IV. Neuer vermehrter Abdruck, besorgt durch G. Roethe und E. Schroeder. Bertelsmann. Gütersloh.
- Grzega, Joachim (2000): Österreichische Nachrichtensprache: paradigmatische und syntagmatische Divergenzen zwischen österreichischer und bundesdeutscher Distanzsprache. In: *ZDL* 67. 53–67
- Helbig, Gerhard (1968): Zum Problem der Genera des Verbs in der deutschen Gegenwartssprache. In: *DaF* 5. 129–148
- Helbig, Gerhard (1982): Bemerkungen zum Zustandspassiv. (Ein Diskussionsbeitrag) In: *DaF* 19. 97–102
- Helbig, Gerhard (1983a): *Studien zur deutschen Syntax*. Bd.1. Enzyklopädie. Leipzig.
- Helbig, Gerhard (1983b): Zustandspassiv, sein-Passiv oder Stativ? In: Helbig, Gerhard: *Studien zur deutschen Syntax*. Bd.1. 47–57
- Helbig, Gerhard (1983c): Zu den zustandsbezeichnenden Konstruktionen mit *sein* und *haben* im Deutschen. In: Helbig, Gerhard: *Studien zur deutschen Syntax*. Bd.1. 58–66
- Helbig, Gerhard (1987): Zur Klassifizierung der Konstruktionen mit *sein* + Partizip II. (Was ist ein Zustandspassiv?) In: C.R.L.G. (Hrsg.): *Das Passiv im Deutschen*. 215–233
- Helbig, Gerhard (1989): Das Passiv — und kein Ende. In: *DaF* 26. 215–221
- Helbig, Gerhard/Fritz Kempter (1997): *Das Passiv*. Langenscheidt. Berlin.

- Helbig, Gerhard/Joachim Buscha (1986⁹): Deutsche Grammatik. Enzyklopädie. Leipzig
- Hermanns, Fritz (1987): Ist das Zustandspassiv ein Passiv? In: C.R.L.G. (Hrsg.) : Das Passiv im Deutschen. 181–213
- Höhle, Tilman N. (1978): Lexikalistische Syntax. Niemeyer. Tübingen.
- Hoffman, Ludger (Hrsg.) (1992): Deutsche Syntax. Gruyter. Berlin
- Isačenko, Alexander V. (1965): Das syntaktische Verhältnis der Beziehungen von Körperteilen im Deutschen. In: SG V. 7–27
- 甲斐崎由典 (2000) : デンマーク語とドイツ語の状態受動完了形 In: Travaux de Cercle linguistique de Waseda. Vol. 5. 26–38
- Kim, Yang Hun (1989): Zum Gebrauch des Passivs und verwandter Ausdrucksweisen in der deutschen Gegenwartssprache. Dissertation. Universität Trier.
- Koo, Myung-Chul (1997): Kausativ und Passiv im Deutschen. Lang. Frankfurt a/M.
- Kratzer, Angelika (2000): Building statives. In: BLS 385–399
- Kulikov, Leonid/Heinz Vater (ed.) (1998): Typology of Verbal Categories. Niemeyer. Tübingen.
- Leiss, Elisabeth (1992): Die Verbalkategorien des Deutschen. Gruyter. Berlin.
- Leirbukt, Oddleif (1983): Zum Konstruktionstyp ‘*Da war bei uns zugesperrt*’. In: NM 84. 77–86
- Lenz, Barbara (1993): Probleme der Kategorisierung deutscher Partizipien. In: ZS 12/1. 39–76
- Lenz, Barbara (1996): *Sein, bleiben* und *werden* im Negations- und Partizipial-Kontext. In: LB 162. 161–182
- Litvinov, Viktor P./Vladimir P. Nedjalkov(1988): Resultativkonstruktionen im Deutschen. Narr. Tübingen.
- Litvinov, Viktor P./Vladimir I. Radčenko (1998): Doppelte Perfektbildungen in der deutschen Literatursprache. Stauffenburg. Tübingen.
- Milan, Carlo (1985): Das Passiv im Deutschen und Italienischen. Winter. Heidelberg.
- 森田貞雄 (2002³) : アイスランド語文法 大学書林
- Musan, Renate (1999): Zur Semantik von werden: Ist prädikatives *werden* transitional? In: ZAS 14. 189–208
- 岡田令子 / 菅原邦城 / 間瀬英夫 (1984) : 現代デンマーク語入門 大学書林
- Rapp, Irene (1996): Zustand? Passiv? — Überlegungen zum sogenannten „Zustandspassiv“. In: ZS 15/2. 231–265
- Rapp, Irene (1997): Partizipien und semantische Struktur. Narr. Tübingen.

- Redder, Angelika (1997a): Handlungstheoretische Grammatik für DaF am Beispiel des sogenannten "Zustandspassivs". In: Dittmar, Norbert/Martina Rost-Roth (Hrsg.): Deutsch als Zweit- und Fremdsprache. 53–74
- Redder, Angelika (1997b): Diskussion des Korreferats von Rolf Thieroff. In: Dittmar, Norbert/Martina Rost-Roth (Hrsg.): Deutsch als Zweit- und Fremdsprache. 87–94
- Sadzinski, Roman (1987): Zur valenztheoretischen Wertung des Agensanschlusses im deutschen Passiv. In: C.R.L.G. (Hrsg.): Das Passiv im Deutschen. 147-159
- Schoenthal, Gisela (1976): Das Passiv in der deutschen Standardsprache. Hueber. München.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst (1988): Zur Wortartklassifikation des Deutschen --- Untersuchungen zur Wortartzugehörigkeit partizipialer Bildungen. In: ZPSK 41. 221–229
- Steube, Anita/Gisela Walther (1972): Zur passivischen Diathese im Deutschen. In: LAB 5. 17–48
- Terakado, Shin (2001): Perspektive der Deutschen Sprache. (www.dokkyomed.ac.jp/dep-m/german/ess30a.html – [ess30d.html](http://www.dokkyomed.ac.jp/dep-m/german/ess30d.html))
- Thieroff, Rolf (1992): Das finite Verb im Deutschen. Narr. Tübingen.
- Thieroff, Rolf (1994): Vorgangs- und Zustandspassiv in romanischen und germanischen Sprachen. In: STUF 47. 37–57
- Thieroff, Rolf (1997): Das "sogenannte" Zustandspassiv. Anmerkungen zu Angelika Redder: Handlungstheoretische Grammatik für DaF am Beispiel des sogenannten "Zustandspassivs". In: Dittmar, Norbert/Martina Rost-Roth (Hrsg.): Deutsch als Zweit- und Fremdsprache. 75–86
- Vaagland, Erling M. (1983): Zur Agensangabe im sein-Passiv. In: Askedal, John O./Christen Christensen/Ådne Findreng/Oddleif Leirbukt(Hrsg.): Festschrift für Laurits Saltveit. 194–200
- Valentin, Paul (1987): Zur Geschichte des deutschen Passivs. In: C.R.L.G. (Hrsg.): Das Passiv im Deutschen. 3–15
- Wilmanns, Wilhelm (1906): Deutsche Grammatik. Teil III-1. Trübner. Straßburg.
- Zifonun, Gisela (1992): Das Passiv im Deutschen: Agenten, Blockaden und (De-) Gradierungen. In: Hoffman, Ludger (Hrsg.): Deutsche Syntax. 250–275
- Zifonun, Gisela/Ludger Hoffmann/Bruno Strecker (Hrsg.) (1997): Grammatik der deutschen Sprache. Bd.3. Gruyter. Berlin.

<Abkürzungen>

BLS: Proceedings of the annual meeting of the Berkeley Linguistics Society

DaF: Deutsch als Fremdsprache

LA: Language

LAB: Linguistische Arbeitsberichte

LB: Linguistische Berichte

LIN: Lingua

MS: Muttersprache

NM: Neuphilologische Mitteilungen

SG: Studia Grammatica

STUF: Sprachtypologie und Universalienforschung

ZAS: ZAS Papers in Linguistics

ZDL: Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik

ZPSK: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung

ZS: Zeitschrift für Sprachwissenschaft